

ISSN : 1346-0676

The Japan Branch Bulletin

The Dickens Fellowship

XL



ディケンズ・フェロウシップ日本支部
年報 第40号

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

年 報

第 40 号



The Japan Branch Bulletin

The Dickens Fellowship

XL

2017

目 次

巻頭言

ディケンズの映画?	佐々木 徹	1
-----------------	-------	---

論 文

ディケンズと人種差別主義		
—— “The Noble Savage” 前後の状況証拠 ——	山本まゆみ	3
『アフリカ農場物語』における男性による看護		
—— ディケンズ作品と比較して ——	西垣 佐理	15

書 評

Matthew Beaumont, <i>Nightwalking: A Nocturnal History of London,</i> <i>Chaucer to Dickens</i>	矢次 綾	29
Paul Jarvie, <i>Ready to Trample on All Human Law:</i> <i>Financial Capitalism in the Fiction of Charles Dickens</i>	中村 隆	34
Jenny Hartley, <i>Charles Dickens: An Introduction</i>	木村 晶子	40
Carolyn W. de la L. Oulton, <i>Dickens and the Myth of the Reader</i>	木島菜葉子	45
新井潤美 『パブリック・スクール —— イギリスの紳士・淑女のつくられかた』	杉田 貴瑞	50
田中孝信・要田圭治・原田範行 (編著) 『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』	西垣 佐理	56

2016 年度秋季総会		62
--------------------------	--	----

2017 年度春季大会		70
--------------------------	--	----

ディケンズ・フェロウシップ日本支部規約		76
---------------------------	--	----

『年報』への投稿について		78
--------------------	--	----

ディケンズ・フェロウシップ会員の執筆業績 (2016~2017)		79
--	--	----

お問い合わせ先		82
---------------	--	----

役員一覧		82
------------	--	----

編集後記		83
------------	--	----

CONTENTS

Editorial

A Dickensian Movie?	Toru Sasaki 1
---------------------------	---------------

Articles

Dickens and Racism: Circumstantial Evidence before and after “The Noble Savage”	Mayumi Yamamoto 3
Male Nursing in <i>A Story of an African Farm</i> : A Comparison with Selected Works of Dickens	Sari Nishigaki 15

Reviews

Matthew Beaumont, <i>Nightwalking: A Nocturnal History of London</i> , <i>Chaucer to Dickens</i>	Aya Yatsugi 29
Paul Jarvie, <i>Ready to Trample on All Human Law</i> : <i>Financial Capitalism in the Fiction of Charles Dickens</i>	Takashi Nakamura 34
Jenny Hartley, <i>Charles Dickens: An Introduction</i>	Akiko Kimura 40
Carolyn W. de la L. Oulton, <i>Dickens and the Myth of the Reader</i>	Nanako Konoshima 45
Megumi Arai, <i>Public School: Educating English Gentlemen and Ladies</i>	Takayoshi Sugita 50
Takanobu Tanaka, Keiji Kanameda, and Noriyuki Harada eds. <i>Sexuality and Victorian Culture</i>	Sari Nishigaki 56

Annual General Meeting of the Japan Branch 2016	62
--	----

The Japan Branch Spring Conference 2017	70
--	----

Rules, Japan Branch of the Dickens Fellowship	76
---	----

Publications by Members of the Japan Branch, 2016-2017	79
--	----

ディケンズ・フェロウシップ日本支部（2016-2017）

2016 年度秋季総会

日時：2016 年 10 月 8 日（土）
会場：中央大学 駿河台記念館

プログラム

理事会（13:30-13:55）

総会（14:00-14:25）

第 1 部 講演（14:30-15:30）「ロンドンの胃袋 —— ディケンズと市場」

司会：田村真奈美（日本大学）

講師：新野 緑（神戸市外国語大学）

第 2 部 シンポジウム（15:45-17:45）「ディケンズと 18 世紀」

司会・講師：原 英一（東京女子大学）

講師：榎本 洋（愛知県立大学）

講師：吉田尚子（城西大学）

講師：原田範行（東京女子大学）

懇親会（18:00-20:00）

会場：駿河台記念館 1 階レストラン「プリオール」

2016 年度春季大会

日時：2017 年 6 月 10 日（土）
会場：松山大学 文京キャンパス 東本館 7 階

プログラム

理事会（14:00-14:30）

開会の辞（14:35-14:40）日本支部長：佐々木徹（京都大学）

第 1 部 研究発表（14:40-16:20）

司会：松本靖彦（東京理科大学）

1. 大前義幸（日本大学）「『ニコラス・ニクルビー』と『坊っちゃん』 —— 漱石作品におけるディケンズの影響を追って ——」

2. 村上幸太郎（宮崎公立大学）「Pierce Egan と Dickens —— *Life in London* と Dickens の初期作品における演劇的ビジョンについて ——」

第 2 部 講演（16:40-17:40）

「翻訳とは何を訳すのか？ —— *Oliver Twist* から読み取れるもの ——」

司会：鶴飼信光（九州大学）

講師：山本史郎（東京大学）

懇親会（18:30-21:00）

会場：郷土料理「五志喜」

巻 頭 言

Editorial

ディケンズの映画？

A Dickensian Movie？

日本支部長 佐々木 徹

Toru SASAKI, President of the Japan Branch

久しぶりに *Godfather* 三部作を通して観た。やっぱり圧倒的にももしろい。悪乗りして Tom Santopietro, *The Godfather Effect* を読んでしまう。すると、監督のフランシス・フォード・コッポラは DVD のコメンタリーで *Godfather saga* は “our Dickens or Trollope” だと語っている、という記述に出くわした。さすがに、これを確認するためにもう一度映画を全部観なおす気にはなれないので、一応この記述を信用するなら、コッポラもいい加減なことを言うものだ。ディケンズはこの映画のような「長編家族物語」は書いていない。トロロープもそうだ。多分コッポラはろくに作品を読まないで、なんとなくディケンズはそういうものだ、と思いつんでこんな発言をしているのだろう（ま、うるさいことを言うのはよそう）。

最近の映画はつまらないので、つい、古い作品ばかり観てしまう。なにせ近頃は CG を多用したファンタジーものばかりが目につき、高い料金を払ってまで映画館に足を運びたいと思わせるような作品は、いや、百円玉三枚握りしめてレンタルビデオ屋まで行こうと思わせる作品すら、まことに少ない。

ただし、連続もののテレビドラマはいいのがたくさんある。24, *Damages*, *Deadwood*, *Homeland*, *House of Cards*, *Line of Duty*, *Billions* などなど。中でも *The Wire* (2002-08) は優れたもので、信頼に値する Alan Sepinwall and Matt Zoller Seitz, *TV (The Book)* もこの作品を “All Time Best 10” の中に入れている。1 シーズンが 10 時間、全部で 5 シーズンだから、50 時間投資することになるので相当の覚悟は要るが、阪神タイガースの試合を 20 試合観なければ済むだけのことだ。

この *The Wire* もまた 19 世紀小説、特にディケンズにしばしば比せられる。物語はボルティモアの黒人麻薬ディーラーたちと彼らを取り締まる警察との駆け引

きを中心に展開するのだが、同時に学校教育や市長選挙といった街全体にかかわる問題も取り上げられる。一つの都市を下から上まですべての階層においてとらえようとする野心的な試みと言ってよい。というわけで、どうやら、長期間にわたって連載される、個性の強い人物がたくさん出てくる都市ドラマ、という点がディケンズを連想させるらしい(しかし、そんなもの、探せばいくらでもあるだろう——ま、うるさいことを言うのはよそう)。

ところが、原作者である David Simon はこの比較を嫌う。ディケンズを高く評価していないからだ。ディケンズは確かに社会問題に切り込みはするが、その解決策はセンチメンタルでご都合主義的なものだ、と彼は言う。だから、最後の第5シーズンにわざわざ“The Dickensian Aspect”というタイトルのエピソードを挿入し、そのタイトルに厳しい皮肉を込める。このエピソードでは『ポルティモア・サン』紙のほんくらエディターが若い記者に社会問題の記事を書かせようとする。その時に、エディターは「ディケンズ的側面」を忘れるなよ、と諭す。お涙頂戴式に書き上げろ、の謂である。この「正しい」忠告のおかげで、巧みにでっちあげられた記事がピューリッツァー賞を受ける運びとなる(Ouch! しかし、これが「ホームレス」についての記事であるのは、確かに「ディケンズ的」ではある)。

インタビュー記事を読むと、サイモンは変に生真面目な人のようだ。ディケンズと比べられたなら、見当違いでも素直に喜んでりゃいいのに。いや、実は、見当違いじゃなく、極上のメロドラマ、という立派な共通点があるのだから。

* * *

この号がみなさまのお手元に届く頃には、僕は支部長をめでたく退任しているはずです。まがりなりにも、6年間なんとか務めあげることができたのは、会員のみなさまのご理解と理事の方々の暖かいご協力があったからです。この場を借りて心より御礼申し上げます。

ディケンズと人種差別主義

—— “The Noble Savage” 前後の状況証拠 ——

Dickens and Racism: Circumstantial Evidence before and after “The Noble Savage”

山本まゆみ

Mayumi YAMAMOTO

はじめに

「高貴な野蛮人」について、『ブリタニカ』では「文学において、野蛮人の理想化された概念で、文明の墮落させる影響にさらされていない人の生まれつきの善良さを象徴する」(8: 748) と定義されている。そして「高貴な野蛮人」の賛美は18,19世紀のロマン主義の著作の中の主要なテーマであると述べられている。それに対してディケンズは「高貴な野蛮人」を撞着語法として用いて、その存在に疑問を提出した。1853年6月11日号の *Household Words* に掲載されたディケンズの “The Noble Savage” をめぐって、一流作家に似合わぬ過激な人種差別発言だとして、彼の伝記作者たちは言及するのを避ける傾向があるように思われる。ディケンズの内面を深く分析するはずの伝記において、“The Noble Savage” への言及がないのは問題である。書かれた年代順に見ると、まず1873年のフォースター (John Forster) の伝記には全く言及がない。また人種差別との関連でストウ夫人 (Mrs. Stowe) について触れることもない。1990年のアクロイド (Peter Ackroyd) の伝記でも “The Noble Savage” についての記述はないが、キリスト教伝道協会が改宗させようとしていたアフリカや西インド諸島の野蛮人を良く思っていなかったディケンズは “a ‘racist’ of the egregious kind” (572) であるとアクロイドは断言している。2011年のトマリソ (Claire Tomalin) の伝記にも “The Noble Savage” について書かれた部分はない。これらの伝記作者たちは、そろって

“The Noble Savage”を問題にしていない。

スレイター (Michael Slater) だけが唯一人、2009年の伝記の中で述べている。ディケンズは彼の小説『荒涼館』の登場人物ジョーのようなスラム街の少年が社会によって見捨てられ、一方でアフリカのズルー、カフィル族が賛美されている現実への怒りを“The Noble Savage”で示したが、スレイターはこれに対して批判的である。彼は“The Noble Savage”を不愉快な読み物であると考え、ディケンズの同情心の限界を示していると指摘した(350)。しかしいくつかのディケンズ関係の書でも“The Noble Savage”がその著者によってタブーのごとく扱われているのは問題である。ディケンズの本質を知るには不可欠の要素である人種差別的な心情を扱うべきと考える。なぜかと言うと、ディケンズの小説と雑誌記事には初期の段階から、その徴候が隠されているからである。

本稿ではヴィクトリア朝の時代状況などに関連して、ディケンズの書いた雑誌記事を中心にして、ディケンズの人種差別主義について考察する。最初に“*The Noble Savage*”以前の雑誌記事を人種差別主義との関連で検討する。次に“*The Noble Savage*”の成り立ちとその記事の内容を、人種差別主義に関する時代状況と共に考察する。最後に“*The Noble Savage*”以後の雑誌記事の中の人種差別主義を探り、ディケンズの異人種の人々との関係を明らかにする。

1. “*The Noble Savage*” 以前

最初に1848年8月19日に『エグザミナー』(*The Examiner*)に掲載されたディケンズの“*Review of Allen and Thompson’s Narrative of the Niger Expedition*”について検討する。これは1841年英国海軍のトロッター大佐 (Captain H. D. Trotter) の指揮の下に、ニジェール川へと派遣された遠征の記録をディケンズが批評した記事である。ディケンズはこの批評を「エクセターホールが擁護することは、すべて決して実行されないというのは、社会、そして政治の手引きの一般的法則として断言できるだろう」(110)という力強い結論で始めている。さらに強調して「エクセターホールは最も説得力がなく、最も望みのない目的に最も熱心で、それにおいて(もちろん)最も著しく失敗した」(110)と最上級の形容詞と副詞を用いている。それと対照的にディケンズはアレン船長と仲間たちの勇気と献身を賞賛し、彼らの生命が失われたことを惜しんでいる(110)。

遠征の主な目的は、① 奴隷貿易の禁止、② 奴隷労働に代わるものを与えること、③ 農業栽培の改善されたシステムのアフリカへの導入、④ 人間のいけにえの廃止、⑤ 異教徒へのキリスト教の真の教義の普及、⑥ その他だった(111)。5月12日朝6時半、遠征隊はプリマス港を出発し、ケープコーストからニジェー

ル川の分流のヌン川(墓場の門と呼ばれる)へと向かった。原住民の代表であるオビ王 (King Obi) と船上で会議が行なわれ、トロッター大佐は人間の売買禁止のためにアフリカの酋長たちと条約を結ぼうとした(113)。その時のイギリスの行政官たちとオビ王との会話が紹介されているが、その内容は前者が後者に命令し、あるいは教え諭すもので、あくまでもイギリス人が上の立場を取っていた。さらにオビ王が会話の間に指を鳴らしたり、落ち着かない様子であることを強調していて、これも先住民がイギリス人よりも劣った存在であることを暗示するものだろう。イギリス人宣教師が神は一人だけだと教えたと、オビ王は二人いると思っていたと答える(118)。

先住民も一方的にイギリス人に命令されるだけではなく、オビ王は奴隷取引をしないという誓約をすぐに破った。これに対してディケンズはオビ王を「アフリカで最も嘘つきの悪漢」(118)と表現していて、これから書かれる“The Noble Savage”を予見させるものがある。やがて遠征隊の人々の多くが熱病にかかり、死亡者が出た(121)。ディケンズはエクセターホールの福音派の博愛主義を批判すると共に、「文明化されたヨーロッパ人と野蛮なアフリカ人の中には、深い溝があるのだ。後者に生命をもたらす空気が前者には死をもたらす」(125)と明確な人種差別主義を示している。1840年代のディケンズには、明らかに人種差別主義が存在していたのだ。ディケンズはイギリスの宣教師に対しても「本国での仕事が完全に終わらなければならない。さもなくば外国には希望はない」(125)と説いている。彼は「そっと、いつの間にか、啓蒙の広がる円が人から人へと延びて行き、ついには地球の周囲の輪となる」(125)ことを望んだが、自民族中心主義の傾向は否定できないだろう。

もう1つ関連する記事として、1852年9月18日に *Household Words* に掲載された“North American Slavery”はモーリー (Henry Morley) とディケンズの共著である。最初にストウ (Harriet Beecher Stowe) の『アンクル・トムの小屋』について、北アメリカの現状の鋭い描写であり、無理な結論と激しく極端な描写という欠点はあるが、奴隷制への関心が再び喚起されたと紹介している(1)。次に奴隷制の歴史を述べ、捕虜や征服された国の人々が奴隷にされた昔からの変化を指摘し、北アメリカの奴隷所有州でも奴隷制が消滅するだろうと述べている(1)。さらにキューバなどのスペイン人の植民地での奴隷に対する冷酷な厳しさと比較して、北アメリカの奴隷所有者を賞賛している(1)。

1840年にアメリカ合衆国の奴隷の数は250万人ほどだったが、1850年には300万人以上で、10年間で増加していた(2)。奴隷制は人間の心から、大切なものすべてを踏みにじるので拷問よりひどい。しかし奴隷から解放されることを望まない黒人奴隷もいて、それに対して「馬や雄牛も理性が与えられたなら、この

ように話すかもしれない」(3)という言葉で、奴隷制への批判を表わしている。黒人差別の実態も示される。黒人と同じテーブルで食事するのを侮辱と考えたり、アメリカ西部の州の大学で母親の先祖に黒人がいる若者が入学を拒否されたりする例があげられる(4)。

アフリカ西部のリベリアは黒人解放奴隷の入植地として1822年に始まり、人口は1万人弱だったが、この記事では「リベリアの黒人はアメリカであらゆる力に抵抗した数少ない人々である」(4)と賞賛されている。1847年にリベリアは独立し、アメリカからの文明化された黒人が30万人の原住民に影響を与えたとある(5)。しかし5万人が英語を学び、キリスト教徒の数が増加しているというのは、アメリカによる文化の押し付け、強要であり、人種差別主義の影が見えてくる。この記事の著者はアメリカ人に奴隷制度は人間の墮落を招くので、奴隷を解放するように促している。これは1838年に全奴隷を解放したイギリスが自国の優位な立場を自覚して、アメリカにあるべき姿を示しているのだろう。黒人を「墮落した民族」と呼び、彼らを目覚めさせれば、有能な労働者の民族が現われるだろうという発言(5)は、1年後の“The Noble Savage”の「野蛮人を文明化によって、地上から消滅させるべきだ」(143)という言葉と類似している。そして最後にアメリカが奴隷制を廃止するなら、イギリスは一番最初に賞賛するだろうと、アメリカ人を鼓舞している(6)。

1840年代と1850年代の雑誌記事の中の2つに見られるのは、程度の差はあるが、ディケンズの人種差別主義である。ただし、“North American Slavery”は共著であり、内容も1842年にディケンズが初めてアメリカを訪問した時に感じた奴隷制への嫌悪感が再びよみがえったかのように、強く奴隷解放を主張するものなので、表面的には人種差別主義は隠されている。しかし「黒人は骨相学者によると、賞賛を好む」(5)という指摘や、「黒人の需要は気候が白人による畑仕事にふさわしくない地域に限定される」(5)という発言からは、身勝手な白人の思い上がりが見えてくる。ディケンズには“The Noble Savage”以前に人種差別主義の下地があったのだ。

2. “The Noble Savage”

ホートン(Walter E. Houghton)は、ヴィクトリア朝という時代の人々の道徳態度の一つとして、力の崇拝をテーマにして述べている。ホートンは、まずスペンサー(Herbert Spencer)による「能力のない人の貧困、軽率な人の苦境、怠け者の窮乏、強者による弱者の押しのけは、大きく、先見の明のある慈悲心の命令である」という*Social Statics*の中の言葉を紹介している(209)。これは人種差別主義

を正当化するものである。そして1850年代半ばまでに、誇り高く好戦的なジョン・ブルは戦いを自慢し、クリミア戦争を歓迎した(210)。ヴィクトリア朝の好戦的雰囲気は経済状況や国民の生活においてと同様に、知識人の中にもあり、イギリスの愛国主義がキングズリー (Charles Kingsley) やカーライル (Thomas Carlyle) のような人々を突撃隊員に変えたと述べている(210)。「白人の優位主義の尊大さ」の結果として、カーライルの“The Nigger Question”が書かれたという指摘もある(212)。したがって、このような時代の風潮は、ディケンズにも影響を与えたであろうことは疑いない。

“The Noble Savage”は*Household Words*の1853年6月11日号の巻頭に置かれた記事であり、他に7つの記事があるが、編集長のディケンズにとって最も重要なものであり、読者をこの雑誌に引きつけるための手段ともなっていた。“The Noble Savage”は18世紀の‘the noble savage’の概念、即ち文明によって墮落させられていない浅黒い肌の民族に見られるより純粋な道徳的性質という考えに対する人々の復活した熱意によって駆り立てられ、執筆されたと、スレイターは考える(141)。事実、オールティック (Richard D. Altick) の*The Shows of London*にも18世紀のインディアン・ブームやタヒチの青年オマイの渡英によって頂点に達した「高貴な野蛮人」熱が記述され(48)、19世紀には1840年のキャトリンのインディアン・ショー(275)、1845年のブッシュマン(279)、1853年のカフィル族の見世物(282)が紹介されている。

“The Noble Savage”の内容を見てみよう。最初に現在形で「私は高貴な野蛮人を全く信用していない」(143)と結論を提示している。その理由として、ディケンズは高貴な野蛮人が人をいらいらさせる人で、迷信のような存在であり、さらにディケンズを侮蔑的に青白い顔の白人と呼ぶので和解できないのだと述べる。そして「野蛮人を文明化によって、地上から消滅させるべきだ」(143)と続ける。

ディケンズは野蛮人の例として挙げたインディアン(数年前にキャトリン氏が連れてきた)を「みじめな生き物である」(144)と嫌悪し、アフリカのブッシュマンもまた「野蛮な手」と「不快な目や叫び」(145)から、その殺害が正当な殺人だと感じている。これらの理由はすべて野蛮人の外面的な要素から引き出された感想であり、はたしてこの記事が読者に対して説得力を持っていたかどうかは疑問である。

1853年6月にロンドンで展示されていたズルー族とカフィル族について、ディケンズは主催者の息子が書いたパンフレットを参考にして書いたとスレイターは示している(141)。ズルー族とカフィル族は皆殺しの戦いを行ない、求婚時には花嫁の父が詐欺師のように花婿からもらう贈り物の牛の数を増やそうとすると、ディケンズは皮肉な調子で描いている(146)。また病気の場合にも祈祷師が

魔法使いを探り出して殺して治療するという迷信的な風習を、皮肉も込めて紹介している (147).

ディケンズは読者に野蛮人の風習を伝えることにより、人々の高貴な野蛮人に対する幻想を打ち砕き、これが現実だと示している。これは目を覚ますようにとの同時代人への警告である。ディケンズは高貴な野蛮人が女性のみ働き、男性は怠惰で、酋長が開く会議ではアイルランドの下院のように無秩序であると類似を指摘している (147-48).

1849年10月7日のフォースターへの手紙の中でディケンズは、文明人も困難な状況ではすぐに野蛮人のようになることを示す野蛮人の歴史を書くという計画を述べていた (*Letters* 5: 622). スレイターはディケンズが “The Noble Savage” の最後で、ヨーロッパの読者を攻撃していると指摘する (142). つまり「高貴な野蛮人と同じ要素が文明人にもあり、それを取り除くべきなのに事実はそうでない」(148) ということである。高貴な野蛮人と文明人の共通点の第一は自己中心癖で、両者ともに自分自身について長々としゃべる悪癖を持っている。さらに求婚する際の贈り物や政治制度、降霊会とテーブル叩きの流行など類似するところが多い。

結論としてディケンズは高貴な野蛮人の要素を否定し、高貴な野蛮人の美德は嘘で、高貴な野蛮人の幸せは思い違い、そして高貴な野蛮人の高潔さなどはばかげた考えで、「世界は彼が存在しなくなれば、はるかに良くなるだろう」(148) とまとめている。この発言はディケンズの人種差別主義の一端を示すと共に、文明人も高貴な野蛮人となる可能性があるという警告と言えるだろう。さまざまな高貴な野蛮人の生活形態を紹介しながらも、外面的でまさに展示物をガラスの外から眺める傍観者としての態度しかディケンズは示さず、1842年のアメリカ訪問の時に南部の奥深くを訪れることを回避した心理状態を未だ継承している。高貴な野蛮人は『ドンビー父子』のバグストック少佐に酷使される原住民と同様に、読者に語りかける言葉を与えられず、文明人にとって悪い見本となっていて、文明人に反省させる道具にすぎない。『ドンビー父子』の原住民は名前も台詞も与えられず、主人からののしられ暴力を振るわれ、人種差別が示されると同時に、文明人の醜さも見えてくる。

ディケンズ自身の原住民についての知識は、ほとんど間接的であった。その証拠をリンドフォース (Bernt Lindfors) が “Charles Dickens and the Zulus” の中で示している。1853年3月にアフリカ南部からロンドンへ、コールドコット父子 (A. T. Caldecott と C. H. Caldecott) と13人のズルー族が到着した (143). ある程度西洋化されていた北アメリカと西インド諸島のかつての奴隷と異なり、アフリカ人やいわゆる原始的民族は珍しい光景だった (143). 5月16日夜に最初の公演が

行なわれ、コールドコットの息子が書いた32ページのパンフレットが6ペンスで売られた(144)。

この公演は準備に2ヶ月間をかけ、画家を雇って背景を書かせるなど、充実した内容だったようで、1853年5月18日の『タイムズ』の批評はディケンズよりも冷静に「今回の見世物ほど、大規模なものではなかった」(145)と伝え、ズルー族の歌と踊りが単調だと述べている(146)。5月28日の『アセニーム』のコラムニストは、ズルー族のすばらしく発達した筋肉や、これらの野蛮人が彼らの役を演じる際のほとんど完璧な劇的効果を挙げて、賞賛している(146)。『スペクテーター』は5月21日に、いくつかの場面がとてもおもしろいと感じたが、叫び声は野蛮だと批判している(146)。同じく5月21日の『イラストレーテッド・ロンドン・ニュース』は魅力的で笑劇よりおもしろいと肯定的に述べている(146)。これらの批評はディケンズの“The Noble Savage”とは明らかに性質を異にしていて、否定するよりも優れた点を賞賛している。こうした記事と比べ、ディケンズはズルー族に対して厳しい態度を取っている。

ディケンズは5月26日にズルー族の見世物を見た。そして *Household Words* の1853年6月11日号の巻頭の記事である“The Noble Savage”を書いた。リンドフォースはこの記事を「ユーモラスなエッセー」(147)と評しながらも、20世紀末において、ヴィクトリア朝文学の学者などがこれについて言及しないことを述べ、その原因はディケンズの見解が現代の感性を当惑させ、不快にさせるからだろうと考えている(147)。リンドフォースはこの記事にディケンズの「喜劇的な誇張の卓越した天賦の才能」(147)が示されていると賞賛し、「高貴な野蛮人」というロマン派の神話の正体を暴露するという目的を達成したと評価する。彼はこの記事肯定する唯一の存在と言えるだろう。

コールドコットの息子は1836年に書かれたアイザックス(Nathaniel Isaacs)の *Travels and Adventures in Eastern Africa, Descriptive of Zoolus, Their Manners, Customs, with a Sketch of Natal* とガーディナー(Capt. Allen F. Gardiner)の *Narrative of a Journey to the Zoolu Country in South Africa* を参考にしてパンフレットを書き、それがディケンズの“The Noble Savage”へと受け継がれ、変化した(150)。アイザックスがズルー族の独裁的な君主制を紹介すると、コールドコットの息子も同じことを書き、それをディケンズがほとんどそのまま真似ている(150)。しかしディケンズの場合には、騒々しく活気のある出来事を騒がしく調子はずれの喜劇に変える傾向があると述べられている(151)。魔女を探す医者が登場する場面も、ディケンズは読者がおもしろく感じられるように、ヨウ、ティル、ポルー、フーシュなどの擬音を多用して描写を誇張している。さらにズルー族の戦いについて、ディケンズの誇張した表現は繰り返され、アイルランドの悪口まで付け

加えられている。ディケンズがコールドコットの息子の描写を彼の意志で大きなものにしたことは明らかである。

ヴィクトリア朝の人々はディケンズも含めて、ブルー族などの他民族を知る機会が少なく、ロンドンの人々の見たブルー族はあくまでも見世物で、真の姿ではないこと、さらに、そのような事実は現代においても存在し、いまだに暗黒大陸を西洋文明の正反対のものとして定義する自民族中心主義が見られることから、リンドフォースはディケンズ的な人種差別主義者が現代にもまだ生きてると主張する (155)。ディケンズは人種差別主義者の代名詞、あるいは代表のように扱われている。ブルー族の行動を誇張した表現を用いて描写し、擬音を多用した文章を書いたディケンズの中の人種差別主義を否定することは難しい。ただし、それは彼の持つ一面であることもまた事実であろう。

3. “The Noble Savage” 以後

ピーターズ (Laura Peters) は、ディケンズの脳の二重性、即ち、空想と科学が彼の脳の一つの部分と構成したと主張し、異民族へのアプローチにも科学的な手法と空想的な手法が混在したことを指摘する (83)。その例として挙げた *Household Words* の記事の中に、“The Lost Arctic Voyagers” がある。これは 1854 年 12 月 2 日号と 12 月 9 日号に掲載され、ディケンズの人種差別主義が継続していることを示している。1845 年 5 月にフランクリン (Sir John Franklin) が 129 人の乗組員と共に 3 回目の北極探検へ出発した。しかし彼らは 7 月後半にバフィン湾で見られたのを最後に行方不明となった (254)。捜索隊のレイ (John Rae) は 1854 年 10 月 23 日号の『タイムズ』に掲載された報告書で、エスキモー人の証言などから、探検隊が人食いの罪を犯したのは明らかだと述べた (255)。しかし『タイムズ』はその後すべての野蛮人と同様に、証言したエスキモー人が嘘つきだと書いた (255)。エスキモー人の証言を否定する『タイムズ』にも人種差別主義は存在していたと思われる。

“The Lost Arctic Voyagers” の中でディケンズは『タイムズ』と同じようにエスキモー人が信頼できないと書いた。その後にレイの報告を引用している。レイは切断された死体の状況はカニバリズムの証拠であるが、エスキモー人はその現場を見たわけでないとして述べた (258)。これに対するディケンズの反応は白人の間でのカニバリズムを否定するばかりでなく、エスキモー人の証言を強く否定するもので、エスキモー人の情報を伝えた通訳がその内容を誇張したのではないかと疑問を提出した (259)。ディケンズはさらにエスキモー人が探検隊を襲って殺した可能性も仄めかして、信心深い人々は文明人の墮落と野蛮人の生まれつきの美德

を主張するが、野蛮人は強欲で、油断のならない残酷な人間だと信じている (260)。ディケンズの主張は 1853 年の “The Noble Savage” と同じ人種差別主義を示している。レイによる衝撃的なカニバリズムの報告に対して、ディケンズは、その事実を受け入れることができなかった。ただしディケンズは前年度にもカニバリズムについて書いていた。それは *Household Words* の 1853 年 12 月 31 日号の “The Long Voyage” で、ここではオーストラリアのイギリス人流刑囚が逃亡した時に起きた出来事が描かれていて、他民族も登場せず、ディケンズはその恐ろしい事件を、感情を入れないで伝えている。

ディケンズは同じ記事の中で、フランクリンの 1819 年から 1822 年の極地探検についても書いている。探検隊の人々は衰弱し骨と皮になり、何人かの仲間達が死に、北米先住民イロコイ族の狩人マイケルにより射殺された隊員もいた (261-65)。その後でマイケルは一人の隊員によって頭を撃ち抜かれて死ぬ。この時のディケンズの表現が、先住民のマイケルを悪魔と呼び、マイケルの射殺をあらゆる世代の読者も喜ぶだろうという偏見に満ちたものであるのは人種差別主義の現われであろう。この記事は次の週の 12 月 9 日号の “The Lost Arctic Voyagers” にも続き、ディケンズはカニバリズムの疑われる難破船の 19 例を挙げて検討している (385-92)。そしてディケンズはこの記事の最後にまた野蛮人を嘘つきで、ほら吹きと呼び、彼らの神を野蛮で口が大きくぎよろ目だと述べ、フランクリン達に対しては勇気ある彼らを愛情をこめて思い出そうと主張する (392-93)。ディケンズの二つの記事の後に、スコットランドの探検家レイは *Household Words* の 1854 年 12 月 23 日号の同じタイトルの記事 “The Lost Arctic Voyagers” で、このような他民族への偏見に反論した。レイはディケンズと同時代人だが、行方不明のフランクリン達を捜索する中で、実際にエスキモー人に接触し、ディケンズの人種差別主義の間違いを指摘した。レイの主張は、エスキモー人は嘘つきでもなければ、肉食性でもないということだった (434)。レイは 1846 年から 47 年に、12 人の隊員と共に越冬したが、武器を持たずに 4 人のエスキモー人に会った時に暴力を振られることはなかったと報告し、エスキモー人の暴力性を否定した (434)。またカニバリズムについても、飢えで亡くなった多くのエスキモー人の例を挙げて否定し、彼らの情報の正しさと記憶の正しさを主張している (434-35)。レイによって書かれた記事はディケンズの人種差別主義を批判するものであり、実際にエスキモー人と暮らして得た体験なので、信頼できる。ディケンズは自ら編集長を務める雑誌 *Household Words* にレイの記事を載せることにより、自分の判断の誤りを認めたと考えられる。実際の体験を持たないディケンズが二週連続で主張した人種差別的偏見は、探検家レイの発言により完全に誤りであることが明らかとなったので、ディケンズにも意見の修正、あるいは変化をもたらす結果

となったであろう。

おわりに

ムーアとピーターズは、ディケンズが“The Noble Savage”を書いた当時の状況や執筆の理由を分析している。ムーアはトーマス・デンマン卿 (Lord Thomas Denman) による一連の記事への返事が“The Noble Savage”であると指摘している。デンマンは1852年9月から10月の間に*The Standard*に6つの記事を載せ、その中で『アンクル・トムの小屋』へのディケンズの反応を非難し、『荒涼館』のポリオブーラー事業に対する皮肉な扱い方を攻撃し、奴隷廃止論者の仕事に決して献身的でないことを公表していた(65)。ピーターズはディケンズの“The Noble Savage”について、彼の野蛮人への突然の過激な嫌悪は全く突然ではなく、何年にも及ぶ要因の結合の産物だと考えた(74)。またストウ夫人の『アンクル・トムの小屋』の驚異的な成功により高貴な野蛮人への崇拜がよみがえったが、ディケンズはそのような束縛から解放されるべきだと感じたことを指摘する(77)。

ディケンズを取り巻く外的状況の中に、“The Noble Savage”執筆の原因がいくつか存在したことは確かである。ディケンズの内面については、ジョウシ (Priti Joshi) がディケンズは土着主義者で文化的同属偏愛主義者だが、生物学的決定論の考えには反対だったと述べ、完全なる人種差別主義者であることを否定している(299)。ジョウシはディケンズが奴隷制と元奴隷の選挙権の両方に反対したことに、彼の博愛主義の限界を見る(298)。しかし“The Noble Savage”の野蛮人は「文明化して地球上の表面から追いやるべきだ」という主張は、野蛮人が生物学的に固定されているのではなく、修正可能な存在であることを示していると考え(298)。ディケンズは確かに完全なる人種差別主義者であり続けることはできなかった。雑誌の編集者として、さまざまな記事に接する中で、彼の意見は変化していった。その一つの例として、*Household Words*の1850年10月26日号の“Cape Sketches”はアルフレッド・ホエーリー・コールが書いた記事で、南アフリカのホッテントット族、マレー人、フィンゴ族の美点と欠点を詳細に述べてあり、この記事を採用した編集長ディケンズの人種差別主義を是正するのに役立ったと考えられる。ディケンズばかりでなく、ヴィクトリア朝の人々の人種に対する考えは科学の発展と共に変化せざるを得なかっただろう。

さまざまな論議を呼んだ“The Noble Savage”だが、その前後の雑誌記事が示すのは、明らかに人種差別主義者のディケンズである。1848年の“Review of Allen and Thompson’s Narrative of the Niger Expedition”で、オビ王を「アフリカで最も嘘つきの悪漢」(118)と呼び、1854年の“The Lost Arctic Voyagers”では野

蛮人は強欲で、油断のならない残酷な人間だと信じている (260)。このような証拠の前では人種差別主義者ディケンズを否定することは難しい。“The Noble Savage” はコールドコットの息子、アイザックス、ガーディナーの3人の著書を参考にして、ディケンズが誇張した表現を用いて描写したものである。

“Review of Allen and Thompson’s Narrative of the Niger Expedition” と “The Lost Arctic Voyagers” も実体験でなく伝聞による記事で、ディケンズの主張を支えるデータが脆弱である。特に “The Lost Arctic Voyagers” は2週続けて同じタイトルで、行方不明となった北極探検隊をテーマとしてカニバリズムの有無を検証したが、その後で実際に北極で探検隊を捜索した人物によりエスキモー人の性質が詳しく伝えられ、ディケンズのエスキモー人に対する偏見が訂正された。ディケンズの人種差別主義の土台はしっかりとしたものとは言えない。

ピーターズの主張するディケンズの脳の二重性、即ち、彼の脳の二つの部分を構成する空想と科学のうち、空想をテーマとする雑誌記事として *Household Words* の1853年1月1日号の “Where We Stopped Growing” がある (83)。この中でディケンズは子供の頃に読んだ物語が大人になってからも持続して魅力をもつことを主張し、その例として『ロビンソン・クルーソー』を挙げている (108)。特にその物語の中の人食い人種が二人の男を殺そうとする場面が取り出されていて、そのうちの一人がフライデーである。ところがこの物語は人が殺され食べられる様子も詳細に描写され、決して子供に夢を与える要素ばかりではなく、むしろ原住民に対する恐怖心を植え付けるものである。フライデーは賞賛されているが、あくまでも文明人を基準としていて、皮膚の色がアフリカの土人と異なり、好ましいオリーブ色と述べられている (173)。この物語を初めて読んだ子供の頃の感覚を持ち続けていることを重視するディケンズには、異民族へのあこがれ、恐怖などが混在していたと思われる。単純に二分されると言うより、空想と科学は、むしろ混じり合い、互いに影響しあってディケンズの精神を作り上げていったのだろう。ピーターズはディケンズが生涯を通して子供時代の読書により、かき立てられた異国風のものの魅力を肯定したと述べたが (1)、それだけではディケンズの精神を理解したことにはならない。

“The Noble Savage” から十年後の1863年9月26日に書かれた “Medicine Men of Civilisation” で、ディケンズは文明人の中の原住民的要素を探り、原住民より優れていると自慢している文明人の社会について探ると述べている (280)。インディアンの祈禱師とイギリスの大法官主事の共通点や、トンガ列島での集会とイギリスの晩餐会、原住民の部族の集会とイギリス政府あるいは野党の支持者との議論の類似点などが列挙され、外への風刺が内へも向けられ、ディケンズの知識の広がりや原住民に対する意識の変化が見えてくる。ディケンズの人種差別意識

は消えていないが、時の経過と共に変化していったと考えられる。異人種を見世物として見てきたヴィクトリア朝の人種差別意識は、ディケンズと同様に大きな変化を迫られていたのだろう。

引用・参考文献

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1991. Print.
- Allen, William, and T. R. H. Thomson. *Narrative of the Expedition sent by her Majesty's Government to the River Niger in 1841*. London: Bentley, 1848. Print.
- Altick, Richard D. *The Shows of London*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1978. Print.
- Cole, Alfred Whaley. "'Cape' Sketches." *Household Words*. Vol. 2. Tokyo: HON-NO-TOMOSHA, 1989. Print.
- Defoe, Daniel. *Robinson Crusoe*. Oxford World's Classics. Oxford: Oxford UP, 2008. Print.
- Dickens, Charles and Henry Morley. "North American Slavery." *Household Words*. Vol. 6. Tokyo: HON-NO-TOMOSHA, 1989. Print.
- Dickens, Charles. "Medicine Men of Civilisation." *The Uncommercial Traveller and Reprinted Pieces*. The Oxford Illustrated Dickens Edition. Oxford: Oxford UP, 1968. Print.
- . "Review: Narrative of the Expedition sent by her Majesty's Government to the River Niger in 1841." *The Dent Uniform Edition of Dickens' Journalism*. Ed. Michael Slater. Vol. 2. London: Dent, 1996. Print.
- . *The Letters of Charles Dickens*. 12 vols. Ed. Madeline House, Graham Storey and Kathleen Tillotson. Oxford: Clarendon, 1965–2002. Print.
- . "The Long Voyage." *The Dent Uniform Edition of Dickens' Journalism*. Ed. Michael Slater. Vol. 3. London: Dent, 1998. Print.
- . "The Lost Arctic Voyagers" (Dec. 2) *The Dent Uniform Edition of Dickens' Journalism*. Ed. Michael Slater. Vol. 3. London: Dent, 1998. Print.
- . "The Lost Arctic Voyagers." (Dec. 2, 9, 23) *Household Words*. Vol. 10. Tokyo: HON-NO-TOMOSHA, 1989. Print.
- . "The Noble Savage." *The Dent Uniform Edition of Dickens' Journalism*. Ed. Michael Slater. Vol. 3. London: Dent, 1998. Print.
- . "Where We Stopped Growing." *The Dent Uniform Edition of Dickens' Journalism*. Ed. Michael Slater. Vol. 3. London: Dent, 1998. Print.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 2 vols. London: J. M. Dent, 1969. Print.
- Goetz, Philip W, ed. *The New Encyclopaedia Britannica*. 30 vols. Chicago: Encyclopaedia Britannica, 1986. Print.
- Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830–1870*. New Haven: Yale UP, 1973. Print.
- Joshi, Priti. "Race." *Charles Dickens in Context*. Ed. Sally Ledger and Holly Furneaux. Cambridge: Cambridge UP, 2011. Print.
- Lindfors, Bernth. "Charles Dickens and the Zulus." *Olive Schreiner and After : Essays on Southern African Literature in Honour of Guy Butler*. Ed. Malvern van Wyk Smith and Don MacLennan. Cape Town: David Philip, 1983. Print.
- Moore, Grace. *Dickens and Empire*. Farnham: Ashgate, 2004. Print.
- Peters, Laura. *Dickens and Race*. Manchester: Manchester UP, 2013. Print.
- Slater, Michael. *Charles Dickens*. New Haven: Yale UP, 2009. Print.
- Tomalin, Claire. *Charles Dickens : A Life*. London: Penguin, 2012. Print.

『アフリカ農場物語』における男性による看護 —— ディケンズ作品と比較して ——

Male Nursing in *A Story of an African Farm*: A Comparison with Selected Works of Dickens

西垣 佐理

Sari NISHIGAKI

はじめに

ヴィクトリア朝時代において、病と看護 (illness and nursing) は重要な文学的テーマの一つであった。フローレンス・ナイトインゲール (1820-1910) やメアリー・シーコール (Mary Seacole, 1805-81) といった看護師の登場によって看護行為が注目され、特に中流階級の女性にとってガヴァネスと並ぶリスpekタブルな専門職と見なされるに至った歴史的潮流があったためである。そのため、文学作品においても看護が重視され、ディケンズやシャーロット・ブロンテといった作家によって、病や看護の場面が物語の重要な転換点として描かれるようになった。

ヒロインによる看護場面がとりわけ目に付く作品としては、ディケンズの『荒涼館』やエリザベス・ギヤスケルの『ルース』 (*Ruth*, 1853) などがあげられる。これらの作品では、ヒロインが看護の主体となって患者を見る形をとり、その結果患者が回復する、あるいは回復できずに亡くなるなど、看護の場面は物語が大きく動く転換点に位置づけられている。

さらに、看護を行うのは女性ばかりではなく、ディケンズ作品では男性も看護の担い手となっている。『ピクウィック・クラブ』、『ニコラス・ニクルビー』、『マーティン・チャズルウィット』、『ハード・タイムズ』、『大いなる遺産』といった作品で男性による看護行為が描かれた。特に『マーティン・チャズルウィット』と『大いなる遺産』では物語展開を左右する重要な場面にもなってい

る。「看護」はヴィクトリア朝文学の一種のトポスであり、ディケンズも様々な種類の看護場面を描いているが、「男性による看護」(male nursing)にも重きを置いていた点が大きな特徴といえるだろう。ただし、男性による看護が作中で大きな意味を持つのは男性が男性を看護する場合に限られ、男性による女性患者の看護は重要な場面として描かれることはなかった。

そもそも、ヴィクトリア朝文学において男性による看護を描いた作家はあまり見当たらず、ディケンズの他にはギヤスケルやブロンテ、ヴィクトリア朝後期に活躍した南アフリカ出身の女性作家オリヴ・シュライナー (Olive Shreiner, 1855-1920) が知られる程度である。ギヤスケルは『シルヴィアの恋人たち』(*Sylvia's Lovers*, 1863) で男性同士の看護を描いている。また、エミリー・ブロンテは男性による女性の看護を『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847) で扱っているが、後述するとおり、それは夫による妻の看護であって、物語上で重要な場面を成すとはいえない。それに対し、シュライナーの『アフリカ農場物語』(*A Story of an African Farm*, 1883) においては、女装した男性による女性患者への看護が物語の重要な一場面として描かれている。Phillip Mallet も、ディケンズやギヤスケルと同様、シュライナーは男性による看護に価値を置いている (Mallet x) と指摘しているが、それはあくまでも指摘にとどまっており、具体的な比較や分析が示されたわけではない。

そこで本論では、『アフリカ農場物語』における男性の看護行為を分析し、ディケンズ作品の事例と比較検討する。その考察を通じて、「男性による女性の看護」をディケンズらが大きく扱わなかった理由と、後にシュライナーがこれを重視し取り上げた理由を明らかにするとともに、ヴィクトリア朝時代を通じて「看護」という文学的トポスがジェンダーとどのように関わってきたのかという問題を解明する糸口を提示したい。

1. ヴィクトリア朝文学における看護の型

作品分析に入る前に、ヴィクトリア朝イギリス文学における看護の型を看護人と患者の関係という観点から整理しておきたい。基本的な看護の構図は、看護する主体——すなわち専門職の看護師あるいは家族などのアマチュアの看護人——と看護される患者それぞれの性別によって大きく4つに分類できる。このうち文学で主に描かれるのは、もっぱら女性の看護人が男性患者を看るという形である。男女の性的役割分業が明確であったヴィクトリア朝イングランドでは、看護は女性性や家庭における女性の義務や美德を示す行為、または Catherine Judd が指摘するように「女性の英雄的行為の現れ」(99) であると考えられてい

た。その結果として、女性看護人と男性患者が結婚する形で美德が報われる結末になっていることが多い。次に多いのが女性看護人と女性患者の事例で、ディケンズの『荒涼館』におけるエスターとチャーリーの関係や、ギヤスケルの中編小説「一時代前の物語」(“Half a Life-time Ago,” 1853)などで見られ、看護人・患者双方の人生が大きく変化したり、女性同士の絆が生まれたりする契機となっている。

男性看護人-男性患者の例はディケンズ作品に多く、『ピクウィック・ペイパーズ』におけるピクウィック氏とサム・ウェラー、『ニコラス・ニクルビー』のニコラスとスマイク、『マーティン・チャズルウィット』のマーティン青年と従僕マーク・タプリー、そして『大いなる遺産』におけるピップとジョー・ガーサリーの関係などがあげられる。中でも『マーティン・チャズルウィット』と『大いなる遺産』では、看護の場面が物語全体の中で大きな転換点となっている。ただし、男性から女性への看護の例は少なく、ディケンズ作品では『ハード・タイムズ』のステーブン・ブラックプールとその妻との間、および『大いなる遺産』のジョーとミセス・ジョーの間に見られるが、他の作家でも、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』やシュライナーの『アフリカ農場物語』など少数があげられるに留まる。

いずれにせよ、ヴィクトリア朝文学における男性による看護の描き手としてはディケンズが第一人者であるといえよう。そのため、次に『マーティン・チャズルウィット』と『大いなる遺産』に見られる男性による看護場面を分析し、ディケンズ作品における男性による看護と登場人物のジェンダー、とりわけ男性性(masculinity)との関わりについて検討する。

2. ディケンズ文学に見る男性の看護とその意義

『マーティン・チャズルウィット』では、アメリカで夢破れ、失意の底にあるマーティン青年が病に倒れた際、従僕のマーク・タプリーが献身的に看病を行う。

マーティンは実際極めて病状が重く、死の床に瀕していた。彼はその状態で何日も過ごし、その間マークの哀れな友人は自分たち自身の状況にかかわらず彼に付き添ってくれた。マークは精神も肉体も疲れ切っていたが、昼間は一日中働き、夜は看病していた。厳しい暮らしと新しい生活の不慣れな苦行に疲れ果てていた。あらゆる種類の陰鬱で気落ちさせるような状況に囲まれていた。それでも全く不平を口にすることも、それに屈することもなかった。(中略) 彼は自分の迷える友人の良き資質しか思い出すことはなく、心も

手も彼のために尽くした。(MC 595)

そして、マーティン青年が無事回復した後、今度はマークが病に倒れ、マーティン青年が看病することになる。その際、自分とは異なり病床にあっても陽気さをなくさないマークに接して、マーティンはマークとの違いに思いを巡らせ、自身の利己的な性格がその最たるものだと気づき、反省する。つまり、看護人となったときにマーティン青年は自分の利己主義を捨て去り、精神的に成長を遂げるのである。男性同士の看護を通じてマーティン青年とマークは階級差を超えた友人となり、イギリスに帰還後、マーティン青年はマーティン老人と和解することで遺産相続の見込みを得る。そして、マーティン青年は愛する女性と結婚し、マークも旅館の女将ルーピン夫人と結婚してそこの主人に収まるのである。

また、『大いなる遺産』においても、主人公のピップはマグウィッチから託された遺産の全てを失い、借金を抱えた状態で失意の底にあるときに熱病にかかり、生死の境をさまよう。その際、かつての義兄で鍛冶屋のジョー・ガージャリーが献身的な看護を行うのである。

私は体力を取り戻すのに時間がかかったが、ゆっくり着実に衰弱の度合いは減っていき、その間ジョーは私に付き添ってくれ、私は幼い頃のピップに戻った気がした。

というのも、ジョーの優しさは私の要望に見事に合っていたので、彼の手の中で私は子供同然であった。ジョーは私に座って話をしてくれたが、それは昔のような自信に満ち、以前のような単純さと昔の控えめに護ってくれるやり方であった。だから、私はあの頃台所にいた日々以来の人生が、過ぎ去ってしまった熱病によるある種の精神的不調だったのではないかと半ば信じてしまうほどであった。ジョーは、家事以外の全てのことをやってくれ、最初に到着した際に洗濯女を解雇した後、感じの良い婦人を家事担当に雇った。(中略) ジョーは私をコートで包み込み、腕に抱えて階下に降り、馬車に運び込んだ。それはまるで自分がいまだに彼の非常に良い性質を十分に与えてくれた頃の幼く無力な人間であるかのようだった。(GE 476)

この描写から分かるように、ピップはジョーの看護によって自分が子供に帰った気持ちになり、それまで利己的だった心を捨て去って自己を取り戻し、ジョーとの友情を復活させる事ができた。看護人としてのジョーは、「彼は穏やかで人の良い、優しい気性の持ち主、のんきで、愚かで愛すべき人物——ヘラクレスのような強さと、弱さも持ち合わせていた」(GE 40)とあるように、鍛冶屋ゆえの

頑強な身体を持ちながら、暴力的なところは一切なく、心は「癒しの天使」であり、文字通りの「優しい男」として描かれている。

その後、病から回復したピップは、友人ハーバートの助けによってクラリカー商会で働くことで経済力を身につけ、エステラとの関係も好転しそうな状況で物語は終わる。ジョーはピップの幼馴染みのビディと再婚し、幸福な家庭を築き上げるのだ。Natalie McKnight は、「ジョーは理想的男性像を体現している」(61)と指摘するが、それは単に男性的肉体を備えているからではなく、ミス・ジョーからの虐待によって逆転していた男女の力関係から脱して、最終的にヴィクトリア朝の理想的家庭を作り上げることで父権的秩序を取り戻したからである。

これら二つの作品に見られる共通点は、いずれも男性主人公が自らの経済的立場を盤石にしようと奔走し、挫折して病にかかるが、男性による看護のおかげで回復して新たな自己を獲得すること、そして、その結果 John Tosh が、「男性性とは、結局本質的に自分自身の家庭の主となること、妻や召使いたちと同じく子供たちにも権威を発揮することなのだ。実際、「父親」としての役割は「父権制」という用語の最初の意味を体現している」(89)と指摘するような典型的なヴィクトリア朝的男性性を確立することである。マーティン青年、マーク、ピップが病に陥っているとき、彼らは独身で経済力を持たず、男性性を喪失する危機に直面していたが、男性の看護を通じて男同士の友情という「ホモソーシャルな」絆を作り上げ、社会との関わりを回復して最後に新たな家庭を持つことで、ヴィクトリア朝中流階級のモデルとなる男性性を確立する。すなわち、ディケンズ文学における男性同士の看護は、危機を乗り越えて男性性を確立するための通過儀礼であり、物語上の決定的な転換点として機能しているのである。

ただし、男性による看護がこのように大きな意味を持つのは患者も男性である場合に限られ、女性患者が相手の場合は、男性の看護行為が物語展開を左右することはない。例えば、『ハード・タイムズ』のステイブンは、アルコール中毒と精神疾患にかかった妻を看病し、『大いなる遺産』のジョーは、何者かによって襲撃され動けなくなったミス・ジョーの介護を行うものの、いずれの場合も女性患者が回復を見せることはなく、看護によって状況が好転することもない。¹ステイブンの妻は彼の死後もレイチェルに物乞いをしながら生きているし、『大いなる遺産』のミス・ジョーは最終的に改心の兆しを見せはするが、結局は亡くなってしまふのだ。

3. 「新しい女」と「新しい男」——『アフリカ農場物語』にみる男性の看護

このように、ディケンズ作品では男性による女性への看護には重要な意味が与

えられていないように見えるが、それは一体なぜだろうか。その問いに答えるため、男性による女性の看護が重要な場面として描かれたシュライナーの作品を検討する。

先述のとおり、ディケンズ作品以外では、『嵐が丘』と『アフリカ農場物語』に男性が女性を看護する例が描かれている。『嵐が丘』第13章には、エドガー・リントン (Edgar Lynton) が妻のキャサリンを看護する描写がある。看護人と患者は夫婦関係にあるため、看護行為は当然のことと見なされるが、乳母のネリー (Nelly) が語るように、エドガーの看護は「どの母親たちよりも献身的なものであった」(WH 103) とされ、男性による献身的看護が高く評価されている。Carolyn Burdett は、『アフリカ農場物語』は物語の構成や舞台の地理的特徴という点で『嵐が丘』に似ている (14) と指摘しているが、実は男性による看護という点においても両作品は共通しているのである。

ただし、『アフリカ農場物語』でシュライナーが描いた男性による女性の看護においては、看護人と患者が婚姻関係にないという点が他作品の事例と決定的に異なっている。『アフリカ農場物語』で看護人となるのはグレゴリー・ローズ (Gregory Rose) という、小説のヒロインであるリンダル (Lyndall) の元婚約者だが、二人の関係は通常の恋愛関係とは大きく異なるものであった。なぜなら、リンダルは Sally Ledger が述べるように、「新しい女の原型」(2) だからである。「新しい女」とは、1894年に Sarah Grand が “The New Aspects of a Woman Question” というエッセイを発表したときに生まれた言葉とされ、イブセンの『人形の家』(A Doll's House, 1878) のノラ (Norah) のように、既存の秩序に縛られることに抵抗し自由を求める女性を指す。そんな「新しい女」であるリンダルにとって必要なことは、教育による経済的自立と、自由恋愛による結婚制度からの解放であり、彼女はまさにそれを実践しようとするのだ。

まず、リンダルは南アフリカのイギリス人農場主の娘エム (Em) のいとこだが、孤児であるがゆえに、エムのように引き継ぐことのできる財産もなかった。そのため、教育を受けて家庭教師となることで経済的に自立する可能性を求めて南アフリカの寄宿学校に4年間通う。だが、彼女がそこで学んだことは、音楽や針仕事といった幸せな結婚をするためのたわいもない行儀作法のみであって、空き時間に自分で様々な書物に触れて知識を得ることしかできなかった。それゆえ、彼女は教育による自立ができないことに失望してしまう。

また、リンダルは経済的自立だけではなく、結婚による安定よりもむしろ束縛されることのない自由恋愛をも望んでいた。寄宿学校を出て農場に帰還した際、リンダルはあるイギリス人男性と既に恋愛関係にあったが、結婚による束縛は拒絶し続ける。その際にもらった指輪を「女性になりたいと思った最初の男性に与

える」(SAF 153) と言うなど、新しいタイプの男性を求めていた。そんな彼女の望みは、幼馴染みであるウォルドー (Waldo) との対話の中にも現れる。ウォルドーとリンダルは、精神的自由という価値を共有しており、その点では男女の枠を越えた友情を築くものの、特に第2部第4章で語られるリンダルの「新しい女」としての生き様に対しては、伝統的な男女の価値観しか持ち合わせないウォルドーが理解者となることはできず、それゆえ二人の関係がそれ以上に深まり進展することもなかったのである。

女性というジェンダーからの解放を願うリンダルは、ジェンダーとは女性が鏡を見ることでかかってしまう呪いであると認識している。

「私たちが青いビーズを糸を通して首飾りにした後、鏡の前に立つ。汚してはならない顔、白いワンピース、そして自分の大きな瞳を見る。その時呪いが私たちにかかる。その呪いは大人の女性になったときに効果が切れる。その頃には私たちは満足してしまって、もはや健康的な生活を物欲しそうに見ることはない。中国の女性の足が靴に合うように、私たちは自分たちの領域に合っているのよ」(SAF 155)

つまり、女性がひとたび鏡の中の「女性らしい」外見を自己イメージとして完全に内面化してしまうと、その「女性らしさ」が、たとえ纏足のように拘束的で不健康なものであろうと、もはやそれを拘束であるとも不健康であるとも思わず、むしろ当然で「自然」だと考える「大人の女性」になってしまうのだという。

このように、鏡を見るという行為は女性にジェンダーの呪いをもたらし罍とされているが、興味深いことに、リンダルの看護人となるグレゴリー・ローズにとっては、鏡を覗くことが、自らの女性性を自覚し男性のジェンダーから逸脱する契機となっている。グレゴリーは、最初から“Rose”という名の通り、女性的な部分を持つ人物として描かれ、彼の男性性はリンダルによって抑えられている。彼女はグレゴリーを最初に見かけたときから彼を「綺麗な赤ん坊」(SAF 149) であると見なし、その後も「本物の女性」であるとか「男女」(SAF 163-164) といった言葉遣いで、グレゴリーのうちに潜む女性性を見抜き、彼が男性性を取り繕っていると考えていた。

事実、グレゴリー自身も自らの男性性が生まれつきのものではないことに気付いている節がある。その傾向は、彼が自分の姿を鏡に映して見る際にとりわけ顕著である。グレゴリーは几帳面に片付けられた自室の壁に鏡を吊り下げており、その鏡を覗き込みながら妹に手紙を書く。鏡に映る彼の濃く青い目には「何かに憧れる」(SAF 140) 様子が示されており、そうした自分を描こうとする。だが、

鏡に映った自分の顔を見るのは「男らしくない」(SAF 140) とすぐに考え直し、「女性は何かにつけて泣くが、自分は男らしく父親からの理不尽な仕打ちに耐えてきた」(SAF 141) などと書き直すことで、自らの男性性をあえて意識しているのだ。また、グレゴリーが偶然発見したエムの母親の古ぼけた衣装一式に袖を通してみた際にも、彼は鏡を覗き込み、髭を隠して自分がどのように見えるかを確認するなど、自らの女性性に強い関心を示している。しかし、それを否定するかのようになり、グレゴリーは以前の婚約者であるエムに対しては結婚もしないうちから一家の主人であるかのように振舞い、男性性をあえて誇示していたのである。

そして、彼はリンダルに会った後すぐに心変わりし、エムとの婚約を破棄してリンダルに求婚するが、その際にエムの時とはまったく異なる態度を取る。既に交際相手の子供を身ごもっていることに気付いていたリンダルは、子供のことは隠したままで、名前を与えてくれるならば結婚してもいいが、貴方は何も見返りに受け取れないとグレゴリーに告げた際、リンダルに夢中のグレゴリーは、「貴女のそばにいられるなら、見返りを望まない」(SAF 199) と了承し、無償の愛を誓う。実際、「見返りを望まない」というグレゴリーのこの言葉は、図らずもリンダルが病の床に伏した際に現実のものとなる。献身的に看護したグレゴリーは、文字通り「見返りに何も得られ」ず、ただリンダルが亡くなるまで看取る事しか出来なかったからである。

こうしたグレゴリーの態度の変化は、彼が通常の男性性獲得の過程から逸脱したことを意味している。つまり、「新しい女」であるリンダルを前にすると、彼の男らしい生き方はその支配力を失い、無償の愛で献身的に他者に尽くすという「女性的な」生き方が選ばれるのである。その点で、リンダルの看護場面を含む章のタイトルはきわめて明示的であり、“Gregory’s Womanhood” (SAF 232) と、グレゴリーの両性具有的性格をはっきりと表している。そして、この章において男性性と女性性の狭間で戸惑うグレゴリーの姿が描かれる際にも、やはり鏡が登場する。グレゴリーは、トランスヴァール近郊の小さな町の宿屋で病の床につくリンダルのそばに看護師として居たいがために近くの間で女装するが、そのとき彼は手鏡を見ながら、「自分は、本当にグレゴリー・ナジアンゼン・ローズなのか」(SAF 238) と、自らのアイデンティティを問い直すのである。

女装したグレゴリーは「女性看護師」としてリンダルの看護を正式に行うことになるが、看護師の仕事始めて4日目には医者から「彼女は私が今まで知っている中で、一番経験のある看護師だ」(SAF 241) と評価されており、ディケンズやブロンテが描いた男性による看護の例と同様に、男性看護者が理想的看護師として賞賛されている。ただし、グレゴリーは看護の名の下に彼女の身体に触れることを許され、リンダルに触れられる喜びを心密かに叫んでいるため (SAF 241),

見返りがないとはいいながら、グレゴリーは看護行為を通じて一種の男性的欲望を満たすことができたと考えられる。そのため、彼は内面まで完全に女性化したとはいえないが、振る舞いは最後まで女性看護師のものであり、彼の正体がリンダルに明かされることはなかった。

また、グレゴリーだけでなく、病床のリンダルにも鏡の場面が現れる。彼女は、一度着替えをして鏡をのぞき込んだ時、幼い頃と同じような白いドレス姿で立ち、「透き通った小さな顔、苦しみを経験することで天使といっても良いほどの美しさ」(SAF 250)をそこに見出す。やがてリンダルは、グレゴリーの献身的な看護の甲斐もなく、彼が深い眠りにについている間に、誰にも看取られず独りで鏡を見つめながら死を迎える。鏡に映った死顔は「驚くほど美しく、穏やかだった」(SAF 253)とあり、リンダルは、いわば女性を縛る鏡の呪いに囚われたままで亡くなってしまふのである。このように、男性による女性の看護は、『ハード・タイムズ』のステープンや『大いなる遺産』でミセス・ジョーを看護したジョーの例と同様、シュライナー作品においても物語展開を大きく変える転機になることはない。

にもかかわらず、男性による看護はこの作品中において看過できない重要な場面だと考えられる。なぜなら、当時は看護がジェンダーに深く関わる行為と見なされていたため、女性性と男性性についての問題を提起するには看護場面を描く必然性があったと考えられるからである。

まず、女性性について言えば、「新しい女」として描かれたリンダルという女性の物語は、いわゆるヴィクトリア朝的「墮ちた女」(“a fallen woman”)の物語になってしまう可能性があり、そこからの脱却を図るために男性による看護場面が必要だったと考えることができるだろう。つまり、「墮ちた女」は救われることなく破滅するという物語ではなく、最終的には死を迎えるにせよ、男性による手厚い看護を受けられたという点に意味があると考えられる。なぜなら、リンダルは世の中から見捨てられて死んだわけではなく、彼女の傍らには「新しい女」としての生き方に価値を認め、献身的な看護を捧げる男性が存在していた証となるからである。ただし、「新しい女」を支えようとする男性は、グレゴリーが女装したように、男であることをやめ、何の見返りも得られないことを覚悟しなくてはならないという。

それでは、『アフリカ農場物語』が提起する男性性の問題とは、単に男性性の否定を意味しているのだろうか。作品の舞台となった19世紀後半の南アフリカにおいて、専門職の看護師は既に女性の仕事であり、正式な夫でもないグレゴリーは女装して看護する他なかったという歴史的制約はあるにせよ、男性が女装して看護を行う点を見ると、男性性は作中で端的に否定されているようにも見え

るだろう。また、看護の経験がグレゴリーの生き方に影響を与えた様子も見て取ることにはできない。というのも、リンダルの死後、彼は社会的男性として生きる元の世界、すなわち物語の最後では三週間後にエムと結婚し、父権的家庭の主人に納まると見込まれるからである。つまり、グレゴリーは『大いなる遺産』におけるジョーと同様、ヴィクトリア朝的「男性」としてのあり方に回帰しており、彼の男性性は損なわれたり失われたりしたわけではない。グレゴリーによる看護は、あくまでも病床のリンダルを看取るという一種の私的空間、病床という極めてプライベートで特殊な局面に限り、いわば一種の例外的行為として行われたのであり、グレゴリーは恐らく今後妻のエムや家族の看護を行うこともなく、ヴィクトリア朝的に「まっとうな男性」として生きていくことになるであろう。

それでも、Ruth First と Ann Scott が「グレゴリー・ローズは、性別の違いという問題に対してある種の両性具有的解決を小説で試みた例である」(First and Scott 106) と指摘するように、また、「グレゴリーの内にある女性性」という章題からも窺えるように、男性の中には女性性が潜むというユングのアニムス・アニマ理論をシュライナーが先取りしており、それが看護行為を通じて明示された、という点は注目に値する。というのも、ディケンズ作品における男性の看護が男性性を確立する契機であったのに対し、シュライナー作品における男性の看護は、男性の中の女性を目覚めさせることで、男性性の揺らぎの契機となっているからである。つまり、『アフリカ農場物語』においては、「新しい女」登場直前のフェミニズムが語られると同時に、男性による看護を通じて従来の男性性を揺るがすことにより、いわば「新しい男」(“New Man”)の可能性も示唆されたといえるのではないだろうか。

4. 男性の看護にみる男性性の「確立」と「揺らぎ」

これまで見てきたように、ヴィクトリア朝文学における男性の看護行為とは、基本的に専門職ではない素人の男性が、しばしば専門職以上に理想的な看護を行うものである。ディケンズにおいては、女性による看護が期待できない状況下で男性同士が看護を行い、自己発見と友情関係を通じて社会的に認められる男性に成長するという形で、ヴィクトリア朝における男性性と父権制獲得への通過儀礼として物語の重要な転機を成している。だが、男性が女性患者を看護する場合、女性患者とは妻のことであり、看護人は夫の責務としての看護・介護生活を余儀なくされ、献身的な看護が報われることはないのである。

シュライナーの作品に見られる男性の看護行為とは男性による女性の看護であり、やはり物語展開上の転機になっているとはいえない。しかも、男性による看

護は、Phillip Malletが「(中略)新しい女はフィクションに対等な「新しい男」の到来を要求し、ジェンダーの境界線は揺らぎ始める。」(Mallet x)と指摘するように、ジェンダーを確立するどころか、逆に性別役割分業に基づくアイデンティティを曖昧にし、揺らぎを与える効果を持っているのだ。つまり、既存の女性性を拒んだリングダルは、看護行為の主体ではなく対象となることで、グレゴリーの男性性をも大きく揺るがすに到ったのである。

ただし、『アフリカ農場物語』で繰り返し描かれた「鏡を見る」という行為が象徴的に示すとおり、シュライナーにおいてはジェンダーの問題があくまで個人的な領域に留まっている。リングダルとグレゴリーは最後まで患者と看護人の関係にすぎず、ジェンダーを超えた新しい関係が生まれることはなかった。ジェンダーをめぐる問題は提起されるものの、男性性と内なる女性性はグレゴリーの問題、女性解放はリングダルの問題とそれぞれ別個であり、両者は最後まで真に交わることがない。こうしたジェンダーの個別主義的なあり方を端的に示すのが、鏡を見るという行為である。グレゴリーもリングダルも鏡を見つめるが、それはあくまでも自己を再帰的に認識する行為であり、他者へと向かうものではない。恐らくはそれゆえに、グレゴリーの看護は自己充足的でリングダルに影響力を及ぼすことがなく、リングダルも看護人が誰であるのか知ろうともしないのである。その点においてシュライナーの物語は、看護場面を社会的関係再構築の契機として描いたディケンズのものとは大きく異なるといえるだろう。

以上のように、男性による看護は、ディケンズにおいては男性性確立の契機、あるいは夫としての役割への従属であり、いずれにせよ家父長的男性という役割に収斂するのに対し、シュライナーにおいては男性性の揺らぎの契機となっている。このように整理してみると、男性同士の看護を重要な場面として繰り返し描いたディケンズが、男性による女性への看護には作中で重要な意味を与えなかった理由も見えてくるのではないか。つまり、男性が看護を通じて新しい自己を見出す物語を描いたディケンズこそ、「看護」が既存のアイデンティティを破壊して再構築する契機となりうることを誰よりもよく知っていたからではないだろうか。

例えば『マーティン・チャズルウィット』においてディケンズの描いた男性による看護とは、主従関係という既存の秩序を壊して階級を超えた対等な関係を作り上げる契機に他ならなかった。だとするなら、「男性による女性の看護」という通念とは逆の関わり方が、ジェンダーに基づく男女関係という秩序を壊し、性別を超えた人間同士の関係を作り上げる契機になったとしても不思議ではない。それはまさしく Holly Furneaux が「男性による看護の物語は、(中略)階級やジェンダー、セクシュアリティの境界線を越え、複雑にさせる」(Furneaux 185)と述

べるとおりである。ディケンズもそれを熟知していたからこそ、性別役割分業に基づく社会と国家の確立が求められた時代にあって、ジェンダーの転覆をもたらしかねない看護の形はあえて描かなかつたのではないか。あれほど男性による看護を描いたディケンズが、男性による女性の看護については夫としての義務の範囲でしか描かなかつたのは、男性による看護がジェンダーに基づく社会の秩序を揺るがすことを避けるためだつたのではないだろうか。

そして、このような観点に立つなら、Joyce Avrech Berkman が「シュライナーの新しい男性についての見解は、彼女の社会思想の中で最も独創的で破壊的特徴を持ったものの一つだ」(Berkman 142) と示唆するとおり、シュライナーこそがディケンズの男性看護のモチーフを継承しつつ、それが孕んでいたジェンダーに対する破壊的側面の一部を引き出して見せたのだということができよう。ただし、シュライナーの作品においても、グレゴリーという新しい男性像が示されたものの、性別を超えた対等な人間関係が実現されることはなく、他の作品にも「新しい男」と呼べる男性は登場していない。つまり、男性性の(再)構築に関わる男性看護の物語は、ディケンズのマーティンやジョーからシュライナーのグレゴリーへと受け継がれたとはいえ、その後に続くことはなかつたと考えられるのではないか。他方、女性性の問題については、「新しい女」という言葉が『アフリカ農場物語』から 11 年後の 1894 年に現れ、さらにシュライナーは『女性と労働』(*Woman and Labour*, 1911) というエッセイや未完の小説『人から人へ』(*From Man to Man*, 1926) 等において「新しい女」のテーマを大きく取り上げている。

このように、ヴィクトリア朝イギリス文学における看護の物語を考えると、ディケンズとシュライナーの作品を比較分析して見えてくるのは、看護という職のリスpekタビリティを主張し、アマチュアの看護を主要登場人物による「男性性/女性性」確立の契機として物語の転換点に据えたディケンズ以降、職業としての看護が後期ヴィクトリア朝には完全に女性のものとして定着したこと(それゆえにグレゴリーは看護するため女装しなくてはならなかつた)、その一方で、アマチュアの看護行為はジェンダーと深く関わっていたため、当時の女性作家が新しい女性像を求めるときには看護の問題と向き合わざるをえなかつたということである。² そしてオリヴ・シュライナーは、「新しい女」を献身的に看護した男性の男性性が揺らぐさまを描くことによって、ヴィクトリア朝のジェンダーの束縛を乗り越えようとしたのだといえるのではないだろうか。

* 本稿は、日本英文学会関西支部第 11 回大会 (2016 年 12 月 17 日 於：神戸市外国語大学) で口頭発表を行ったものに、加筆修正を加えたものである。

** 本稿は、JSPS 科研費 JP24720141 の助成を受けたものである。

註

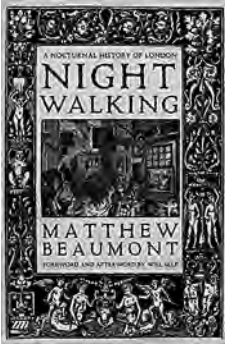
1. ディケンズ作品において男性が看護する女性患者は、夫を困らせる暴力的な存在として描かれ、かつ肉体的に回復の見込みがないとされている。家父長制に反して家庭内では女性上位であり、看護によって夫婦関係が好転することもない。また、男性同士の看護の物語では看護できる女性が不在であるが、女性が患者の場合はスティーブンやジョーの妻を看病する女性（『ハード・タイムズ』だとレイチェル、『大いなる遺産』ではビディ）が存在している点も異なる。特にスティーブンの場合は、妻に対する愛情は枯渇し、レイチェルとの再婚と妻の死を夢想するほどである。レイチェルは、スティーブンが「優しすぎて、助けることなく妻を死なせたり、苦しませたりすることなどできない」（HT 87）と言うが、スティーブン自身は、レイチェルとの関係を進展させたいという欲望に囚われているのだ。また、ジョーの場合は、ミセス・ジョーが何者かに襲撃されてからというもの、彼女がそれまで持っていた暴力性を潜め、ジョーを頼りにするという点で態度に大きな変化を生じたものの、それが身体の回復に結びつくことはない。
2. たとえば、ヴァージニア・ウルフは、『灯台へ』（*To the Lighthouse*, 1927）という作品でヴィクトリア朝的「家庭の天使」を葬り去っている。『灯台へ』では、ヒロインのラムジー夫人（Mrs Ramsay）がヴィクトリア朝の理想的女性として、家族や友人たちを癒す「ナース」としての役目を果たしていた。だが、彼女の死後、独身の画家である「新しい女」リリー・ブリスコウ（Lily Briscoe）は、彼女に代わってラムジー夫人の癒し手になることを拒み、ラムジー夫人のようなヴィクトリアン・ナースの役割を過去のものにする。詳細は拙論『『灯台へ』にみるヴィクトリアン・ナースとしてのラムジー夫人』（31-35）を参照のこと。

Works Cited

- Berkman, Joyce Avrich. *The Healing Imagination of Olive Schreiner*. U of Massachusetts P, 1989.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. Edited by William M. Sale and Richard J. Dunn, 3rd ed., Norton, 1990.
- Burdett, Carolyn. *Olive Schreiner*. Northcote House, 2013.
- Dickens, Charles. *Great Expectations*. Edited by David Trotter, Penguin, 1985.
- . *Hard Times*. Edited by Kate Flint, Penguin, 1995.
- . *Martin Chuzzlewit*. Edited by P.N. Furbank, Penguin, 1968.
- First, Ruth and Ann Scott. *Olive Schreiner: A Biography*. Women's, 1989.
- Furneaux, Holly. *The Queer Dickens: Erotics, Families, Masculinities*. Oxford UP, 2009.
- Judd, Catherine. *Bedside Seductions: Nursing, and the Victorian Imagination, 1830-1880*. Macmillan, 1998.
- Ledger, Sally. *The New Woman: Fiction and Feminism at the fin de siècle*. Manchester UP, 1997.
- Mallett, Phillip. "Preface." *The Victorian Novel and Masculinity*. Edited by Phillip Mallett, Palgrave Macmillan, 2015, pp. v-xiii.
- McKnight, Natalie. "Dickens and Masculinity: The Necessity of the Nurturing Male." *The Victorian Novel and Masculinity*. Edited by Phillip Mallett, Palgrave Macmillan, 2015, pp. 51-66.
- Schreiner, Olive. *The Story of an African Farm*. Edited by Joseph Bristow, Oxford UP, 1992.
- Tosh, John. *A Man's Place: Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England*. Yale UP, 1999.

西垣佐理. 「『灯台へ』にみるヴィクトリアン・ナースとしてのラムジー夫人」『関西学院大学英米文学』第 60 卷 (2016 年 3 月) pp. 19-38.

書 評
REVIEWS



Matthew BEAUMONT,
*Nightwalking: A Nocturnal History of London,
Chaucer to Dickens*
(496 頁. London: Verso, 2015 年, 本体価格 £16.99)
ISBN-13: 9781781687956

(評) 矢次 綾
Aya YATSUGI

“nightwalking” と言えば、私がまず思い出すのは、*Little Dorrit* 第 14 章で、マーシャルシー監獄から締め出されたヒロインが、朝が来るのを待ちながら監獄周辺を彷徨する場面である。彼女の足取りをたどりながら、読者は、娼婦と思われる女性を始め、行き場のない人々が彷徨うロンドンの夜を垣間見る。ヒロインは監獄の門で足を止めても、人の気配を感じるとまた歩き出す。その様子から読者は、彼女が歩くことによって危険を回避し、寒さに耐えているだけではなく、一時的であれ家を失った、落ち着かない気持ちを紛らわそうとしているという印象を持つのではないだろうか。同様に落ち着かない気持ちをディケンズ自身も抱えながら夜の街路を歩き、エイミー・ドリットの他にも夜間彷徨する人物を創造し、“Night Walks” を始めとした夜間彷徨にまつわるエッセイを書いたと推測される。

この場面のように、夜の闇は昼間に見えていたものを覆い隠すと同時に、昼間には見えなかった都市の本性を暴き出す。換言すれば、昼間のロジックから社会的、道徳的、精神的に逸脱した夜間彷徨者の姿を浮かび上がらせ、彼らの内面へと見る者を誘う。多くの文人たちが、夜にこのような側面を見出し、夜間彷徨者の姿を叙述することを通して、闇に覆われた都会の実態を描き出し、闇の中を彷徨せずにはいられない心理について考察した。文人自身が夜の街路を彷徨することもあった。以上の点を念頭に置いて、マシュー・ポーモンは *Nightwalking* において、13 世紀から 19 世紀にかけてのロンドンの夜に関わる歴史をたどり、英文学の “night side” を解明している。その前提としてポーモンは、“night-walking” が、例えばディケンズのエッセイのタイトル “Going Astray” が示す通

り、目的のない夜歩きを指すことを明確にする。さらに、彼は、家を持たない貧民層が抛り所を求めて夜間彷徨することを“noctivagation”，主に富裕層がレジャーの一環として夜間彷徨することを，“noctambulation”と定義する。そして、街灯が導入されナイトライフが生まれた17世紀後半に、ロンドンの夜のあり方が転換期を迎え、19世紀に都会の夜が再吟味されるに伴い、犯罪行為とみなされていた夜間彷徨が、対抗文化としての側面を持つようになったと指摘して、以下の通り論を進めている。

第一部第1章“Crime and the Common Nightwalker: The Middle Ages and After”でポーモントは、晩鐘が鳴った後の目的のない外出は刑罰の対象だったことを、ウィリアム一世の時代にさかのぼって指摘し、英文学史上初の夜間彷徨者が登場した作品として*The Canterbury Tales*の“The Cook’s Tale”を挙げている。以降の夜間彷徨を巡る動きとして、カルヴァン主義の普及による意識の変化や、夜間彷徨者として逮捕される層の変化について述べている。

第2章“Idle Wandering Persons: Roisterers and rogues in the Early Modern Period”では、16世紀から17世紀に、富裕層が夜のレジャーを楽しむようになるのと同時に、貧困が社会問題化し、浮浪者や売春婦に加え徒弟が犯罪予備軍として危険視されるようになったことが吟味されている。そのような世相を記す例として、*The English Rogue* (1665)が挙げられている。夜警が組織されるようになったのもこの時期であり、その証拠としてトマス・デッカーの“The Bellman’s Cry” (1608)があるが、王政復古以降、夜間彷徨が必ずしも犯罪と直結させられなくなったことにも、ポーモントは触れている。

第3章“Affairs that Walk at Midnight: Shakespeare, Dekker & Co.”では、シェイクスピアとその同時代人にとっての夜のあり方——例えば、シェイクスピアの史劇に、人物が闇に身を隠して真実を探索するというモチーフが見出される点、ベン・ジョンソンらの作品と同様に、*Hamlet*の中で夜が煉獄として表現されている点、*Macbeth*において夜間彷徨が存在論に関わる問題として提示されている点、シェイクスピアが夜間彷徨者を生きながら死んでいる悪魔的な存在と見なしている点——について論じられている。加えて、デッカーの*Lanthorne and Candle-light ; or, The Bell-man’s Second Nights Walker* (1608)などを基に、ルシファーをフラヌールの先駆者と考える可能性についても考察されている。

第二部は、第4章“Darkness Visible: Night and the Enlightenment in the Eighteenth Century”から始まる。18世紀に灯りの点ったショッピングストリートが出現し、買い物夜のレジャーの一環となり、富裕層が街路で“promenading”を楽しみ始める一方、貧困層の生活は変わらず、社会の二層化が進んだ。そういった二層間の緊張状態が、無意識の領域に属する精神的怪物として、理性の眠る夜に出現

する可能性が懸念された。この懸念を表現した作品として、ホガースの *Four Times of the Day* (1736) の “Night” が挙げられている。夜の実態を風刺したものとして、ジョン・ゲイの *Trivia: The Art of Walking the Street of London* (1716) が、さらに、娼婦を貶める中産階級への怒りを表したのものとして、1751年の *Rambler* に掲載されたサミュエル・ジョンソンのエッセイが挙げられている。

第5章 “The Nocturnal Picaresque: Dunton, Ward and their Descendants” では、夜の街路での冒険談 “nocturnal picaresque” に焦点が当てられている。最も影響力があった作品として挙げられているのは、ネット・ウォードの *The London Spy* (1698-1700) である。ウォードは、バフチ的なカーニバルの様相を呈する魚市場ビリングスゲートに主人公を至らしめることを通して、彼が理性の境界を越えていく様子を表現しているが、この点は、後続の *The Midnight Rambler; or, a New Nocturnal Spy* (1770) も同様だと見なされている。*The Midnight Rambler* の冒頭で称賛されている、アラン＝ルネ＝ルサーージュの *Le Diable Boiteux* (1707) で、フラヌールの先駆けと言える悪魔アスモデウスに先導されて、学生が夜の都市にうごめく人々の様子を観察する点や、例外的に女性を主人公とする冒険談 *The Midnight-Ramble; or, The Adventure of Two Noble Females* (1754) にも注意が払われている。

第6章 “Grub Street at Night: Churchill, Goldsmith and Pattison” でボーモントは、“the Grub Street authors” に着目する。この作家群誕生の背景として、資本主義社会の進行に伴い文学作品も商品化した結果、パトロンを失った文人が街路を彷徨するようになり、彼らが浮浪者と関連づけられるようになったことが指摘されている。この作家群に属するチャールズ・チャーチルとゴールドスミスは、個人や社会の真の姿は夜に現れるという思いを詩作に反映させた。彼らのような根無し草の知識人はセント・ジェームズ・パークにも集ったが、ボーモントは、リスペクタブルな界限にあるこの公園を、ロンドンの二面性の象徴と見なし、そこにあるベンチで寝泊まりしていた詩人として、ウィリアム・パティソンを挙げている。

ボーモントは、タイトル “Midnight Rambles: Savage and Johnson” が示す通り、第7章でサヴェッジとジョンソンについて吟味する。*Le Diable Boiteux* における悪魔アスモデウスに先導される学生よろしく、ジョンソンは、周囲を観察しながら歩く喜びを熟知するサヴェッジと共に夜間彷徨するのを楽しんだとボーモントは推測する。さらに彼は、サヴェッジ伝においてジョンソンがサヴェッジを理想化している可能性を示唆する一方、18世紀におけるボヘミアン詩人の伝説がいかにして誕生したかを記している点に、この伝記の重要性を見出している。

第8章 “Night on the Lengthening Road: Wordsworth, Clare and Romantic Vagrancy” から始まる第三部において、ボーモントは、ロマン主義のイデオロ

ギーが隆盛を誇る以前、田園での徒歩旅行がどのように捉えられていたかを分析した上で、ワーズワスを中心としたロマン派やその周辺の詩人について吟味している。若きワーズワスにとって田園での徒歩旅行は都会的なリスpekタビリティに対する反発行為だったが、自分の成長を記した“Bildungsroman”的な詩 *The Prelude* では、徒歩旅行と人生を歩むことを重ね合わせている。ポーモントは、*The Prelude* における最も重要な瞬間が月夜に到来したことに着目する。月に照らされた街道は詩人が自己と向き合う鏡として機能し、自分の肉体と精神が一体化したという感覚を詩人にもたらしたと彼は解釈している。詩人が自分と浮浪者との共通性を見出したことにも注目されるが、当時は対仏戦争などの影響から、浮浪者が目につきやすい時代であり、ワーズワスに限らず、詩人たちが自分は社会から疎外されているという意識から、浮浪者を自分の分身と見なし、彼らの姿を作品に書き込んだ。そのような詩人の一人として労働者のジョン・クレアが挙げられている。

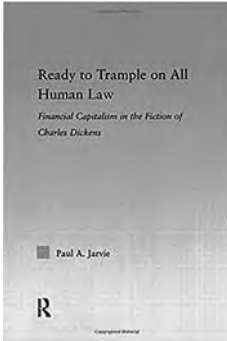
ポーモントは、第9章“London’s Darkness: William Blake”で、ワーズワス的な徒歩旅行者の詩人であり浮浪者でもあるという自己認識を抱いていたブレイクが、ロンドンを、啓蒙時代にあっても精神的な灯りが点されない闇に覆われた都として、また、タイバーンの絞首台によって象徴される罪と罰の都として見なししている点について、続く第10章“The Nocturnal Labyrinth: Thomas De Quincey”では、ド・クインシーが、*Confessions of an English Opium Eater* (1821) で自分の人生をどのように描出しているかについて、それぞれ吟味している。ポーモントは、ド・クインシーを、ロマン主義的な夜間彷徨者と位置づける一方、ロマン派との相違点として、政治的な保守性、浮浪者というよりも娼婦に共感していた点を挙げている。孤独な夜間彷徨の描出に執着した点ではディケンズと共通することにも、ポーモントは留意している。

ポーモントは第四部第11章“Crowded Streets, Empty Streets: The Early Nineteenth-Century City at Night”で、チャールズ・ラムが都会の夜の活力に心惹かれていたことを指摘した上で、19世紀の夜の特徴について分析している。ガス灯が街路を照らす異空間であり、断続的な変化がもたらされる昼と昼の間にある中間的な時間であったために、当時の夜は中世的な休息をもたらさず、人々が過去と現在との連続性を感じるのを困難にしていた。リー・ハントが“Walks Home by Night” (1828) において夜警に関心を向け、そのノスタルジックな姿を叙述することを通して歴史の連続性を暗示しようとしたが、ロバート・ピールが警察のあり方を一新させ、夜を見張る者のあり方にも変化が生じていた。

第12章“The Dead Night: Dickens’s Night Walks”と第13章“A Darkened Walk: *The Old Curiosity Ship and Dickens’s Fiction*”において、ポーモントは、ディケン

ズ自身や、彼が創造した人物たちの夜間彷徨のあり方に着目している。第12章では、ディケンズが妻キャサリンとの不和に悩むようになった1850年代半ばに、初恋の相手マライア・ウィンターの家を周囲を闇に紛れて歩き回ったり、1857年10月の深夜にロンドン中心部の自宅からギヤッツ・ヒル・プレイスまで歩いたりしたこと、ロンドンにおける夜間彷徨に異常な執着を抱いたことなどを挙げながら、夜歩きせずにはいられない彼の心理を分析し、夜間彷徨が彼にとって狂気もしくは中毒の症状であり、心を癒す一方で毒として作用していると指摘している。第13章では、*The Old Curiosity Shop* や *Oliver Twist*, *Barnaby Rudge* などにおける夜間彷徨者を例に挙げながら、彼が描く夜のロンドンの、煉獄、共同墓地、逃亡者や追放者の避難所としての側面を吟味している。

エドガー・アラン・ポーについて述べた第14章“Conclusion: The Man of the Crowd”では、夜の街路を描いた19世紀後半の作品における重要人物である探偵もしくは探偵的な人物が、ポー作品に登場することに加え、ポーの描く夜間彷徨者が悪魔的な人物であり、大都会における最も得体の知れない存在であることが考察されている。章題に挙げられた短編小説において、探偵的な観察者である一人称の語り手は、ある老人に目を留め、正体を突き止めようと後を追うものの、老人を“the man of the crowd”と結論し、その内面を探索することを断念する。そのように不可思議な人物と、彼の本質だと考えられる群衆、その総体とも言える都市の姿を描くことで、ポーは幾世期にも渡って存在し続けている夜間彷徨者とロンドンの神話的重要性を提示していると述べて、ポーモントは本書を締めくくっている。



Paul JARVIE,

*Ready to Trample on All Human Law :
Financial Capitalism in the Fiction of Charles Dickens*
(205 頁, London: Routledge, 2015 年, 本体価格 5549 円)

ISBN: 9780415869461

(評) 中村 隆
Takashi NAKAMURA

本書は「ディケンズの小説における財政資本主義」という副題を持ち、冒頭から「使用価値」、「交換価値」、「剰余価値」等々の『資本論』(*Das Kapital*)的な用語がちりばめられている。しかし、著者のジャヴィー (Paul Jarvie) は、たとえば、テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) のような先鋭なマルクス主義の批評家ではない。のみならず、彼の辞書には、階級闘争の「か」の字もないようである。

本書を読みながら「はて？」と途中で首を傾げ、試みにネットで検索したところ、著者は、ビジネス学の教育畑で経験を積んだキャリアを持ち、現在は、経営マネジメント業務を手広く扱うコンサルティング会社の共同経営者となっており、まさに資本主義を体現する起業家なのだ。肖像写真からうかがえる風貌も、学究肌とは対照的な実務家風である。

本書は著者が、タフツ大学 (Tufts University) で博士号を取得した PH. D 論文に基づいている (ラウトレッジ社 (Routledge) からの初版は 2005 年)。全体は 4 章構成で、対象となるディケンズの作品は 4 つである。第 1 章は、『ニコラス・ニクルビー』(*Nicholas Nickleby*, 以下、『ニクルビー』)、第 2 章は、『クリスマス・キャロル』(*Christmas Carol*, 以下、『キャロル』)、第 3 章は、『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*, 以下、『ドリット』)、第 4 章は『互いの友』(*Our Mutual Friend*) である。

第 1 章の大きな主題は「利子」である。マルクスは『資本論』で、「利子」は魔物的な「光りかがやく」魅力を放つ商品であると述べているが、『資本論』(七) (岩波書店, 1968) 96, ディケンズ (Charles Dickens) の小説中には何人もの忘れがたい「利子」で生計を立てる「貨幣資本家」がいる。一例が、『ニクルビー』の悪党、ラルフ (Ralph Nickleby) である。彼は「貨幣資本家」の極北というべき「高利貸し」(usurer) である。高利貸しについては、マルクスがルター (Martin Luther) の言葉を引き、効果的に説明している。高利貸しとは「他の人々の労働、

憂苦，危険，損害によって，食い，富み，怠惰無為に栄耀栄華に耽ろうとする」人々である（『資本論』(七) 100）。

著者は、『ニクルビー』の経済構造を分析するにあたり，二種の資本家を指定する。一方に，ラルフに代弁される，社会秩序を蹴散らす猛獁な資本家（高利貸し）がいて，もう一方の極に，慈善心にあふれたチアリブル兄弟（the Cheerybles）がいる。この双子の兄弟は，商業を営むという点で資本家にはちがいないが，困窮する「持たざる人々」（the have-nots）に救いの手を差し伸べる。救われたのは，たとえば，ニコラスであり，マデリン（Madeline Bray）であり，ニコラスの妹のケイト（Kate Nickleby）である。著者は，チアリブル兄弟に表出される良い資本主義を「兄弟愛資本主義」（brotherly capitalism）と呼ぶ。この特殊な資本主義は，一見，社会秩序を破壊するラルフ的資本主義を葬り去ったかのように見える。だが，ラルフの自殺を彼の敗北と捉えるような表面的理解を著者は否定する。なぜなら，小説において売り出されるチアリブルという「商品」とラルフという「商品」を比べると，ラルフという商品の方が圧倒的に「広告宣伝料」が使われているからである。著者は，登場人物をそれぞれ一つの商品とみなし，それに注ぎ込まれる時間と言葉を比較し，読まれるための「時間」と費やされている「言葉」の数を「広告宣伝料」に置き換え，ラルフという商品こそが絶賛売り出し中と見たのだ。

第2章の『キャロル』論もまた，マルクスが基軸となり展開される。ディケンズの作中人物でも1，2位を争うほどの有名人であろうスクルージ（Ebenezer Scrooge）は，ラルフがそうであったように，「高利貸し」であり，なおかつ「守銭奴」（miser）である。「守銭奴」についての巷間よく知られたマルクスの言葉があり，著者は，第2章の冒頭部でその箇所を引用している。いわく「守銭奴が，ただ気狂いじみた資本家であるに反して，資本家は合理的な守銭奴である。」（Jarvie 51）。

少なくとも，スクルージの「半身」は「気狂いじみた資本家」であろう。著者が引用するのは，クリスマスの「使用価値」を罵り倒す，スクルージの罵詈雑言である。和訳して引用する。

「メリー・クリスマスといったな？メリー・クリスマスなんて糞食らえだ。金もないのに請求書が山のように来る，それがクリスマスじゃないか。齢をもう一つ取るのに，週給がびた一文も増えない，それがクリスマスだろ。一年ぶんの家計簿を見返して，12ヶ月ぶっ通しで，大赤字だったことがわかる季節，それがクリスマスだ。」（Carol, Stave I）

著者が唱える「キャロル世界」と「反キャロル世界」という両極を矛盾を孕みつつ体現するのがスクルージである。守銭奴としての彼は「反キャロル世界」の住人であるが、他方、作品掉尾で、クリスマス礼賛者へと改宗したように見えるスクルージは美しい「キャロル世界」をも具現する。では、「キャロル世界」とは何か？

端的な例は「過去のクリスマスの幽霊」(the Ghost of Christmas Past) に連れられて見るスクルージ自身の孤独な子供時代から見えてくる。少年時代のスクルージは、学校で一人ぼっちで本を読んでいる。その傍らのベンチに座り、遠い昔の幼い己の姿を見て、現在の老いたスクルージは憐憫の情にかられる。そして、スクルージは思い出すのだった。アリ・ババの物語を読んでいた時、まさにアリ・ババが彼の目の前に現れたことを。この場面を踏まえて、著者は、子供の「空想の力」(fancy)や「想像力」(imagination)が、守銭奴スクルージを「救済する力」(redemptive function)を持っていると指摘している(Jarvie 58-59)。確かにこの場面を経て、スクルージは変容の第一歩を遂げる。というのも、自身の孤独な子供時代を眼前に見て、せつない郷愁にとらわれた彼は、前夜、貧しい子供が家の前でクリスマス・キャロルを唄うのを聞いて、荒々しく追いついたことを思い出し、懺悔の涙さえ流すからである。これはスクルージの Ash Wednesday ではあるまいか。

だが、ジャヴィーはこの「キャロル世界」の底流に常に、そのアンチ・テーゼである「反キャロル世界」が還流し続けていることを忘れてはならないという。その中心には、狂乱のマモン神たる「貨幣」がある。著者は、救済する力を本質的に持っている「子供」たちもまた、常に「商品」化される可能性を秘めていると指摘している。

アリ・ババの場面から少しあとで、スクルージは幽霊に伴われてかつての恋人ベル(Belle)の家族のクリスマスの団欒を覗く場面があるが、この時、スクルージはベルの美しい娘に思わずみとれ、「唇」、「睫毛」、「髪の毛の小さな束」など、少女の身体の一つ一つを粘着質な視線でなぞっていく。そして、少女の「髪の毛の小さな束」を欲しくなり、それを「値段のつけようもない宝物」(keepsake beyond price)だと呟く。このように、美しい少女の身体を商品化する守銭奴のエロスの精神を、ジャヴィーは「道徳的な逸脱」(moral dis-order)であるとし、「転覆的」(subversive)だと指摘している(Jarvie 65)。老人の性はファンタジー的「キャロル世界」を根底から覆すのだ。加えて、スクルージが内包するユダヤ教という異教性が彼の「改心」あるいはキリスト教的な「改宗」(conversion)をぐらつかせる。

第3章は『ドリット』論である。著者によると、この小説は、「交換価値」と

「使用価値」の相克で出来ている。交換価値、すなわち、貨幣を体現するのが謎めいた銀行家・投資家であるマードル (Merdle) や「マーシャルシー債務者監獄」の父、ドリット (William Dorrit) であり、使用価値は、子供の善良さと自己犠牲的愛の体現者であるドリット (Little Dorrit) と使われるモノを生み出す発明家ドイス (Daniel Doyce) によって表象される。この章は、『ドリット』からの引用よりもむしろマルクスからの引用が多く、まるで『ドリット』を利用した『資本論』の註解のようですらある。

著者は、マルクスが、資本家とは資本が「擬人化」した姿であると述べていることを踏まえ (『資本論』(一) 267)、マードルを「脚を持った資本」(capital on legs, Jarvie 93) とみなす。つまり、マードルはもはや人間ではなく、終わりなき「自己増殖」を続ける貨幣そのものである。マルクスによると、貨幣もまた商品であるが、畢竟、マードルも「商品」と化したとジャヴィーはいう。それが明示されるのは、パリのモルグ (死体保管所) で、身元不明の多くの死体がガラスケースに陳列され、観客に見られたように、マードルの自殺後にその死体が衆人環視にさらされる時である。マードルの死体は、浴槽という「箱」に入れられ、シーツと毛布で「包装され」ていた。ぶざまな死体であるとはいえ、マードルという資本は、「商品」として正当な扱いを受けていたのである。

『ドリット』における使用価値の具現者である発明家ドイスは、確かにモノを生み出す存在だが、小説を不在にしている時間が長すぎ、単に大団円をもたらすための「機械仕掛けの神さま」のようだとしり捨てられる。ドイスの存在意義をさらに打ち消すのは、画家のガウアン (Henry Gowan) である。この芸術家はモノを作り出す側に見えるが、自分の絵は、貨幣を得るための手段でしかないと公言する。絵は所有され、鑑賞され、すなわち「一定欲望の充足」がなされて初めて使用価値を発揮するが (『資本論』(一) 263)、彼は自分の絵の交換価値 (値段) にしか興味がない。

著者は、作中でリトル・ドリットのみが「投機熱」という感染する病に罹っておらず、献身的な愛と不変の善良さという使用価値を維持していると述べているが、彼女の父の存在が娘を貶める。というのは、父は娘を誰かの「嫁」という商品として扱い、自分への利益誘導の手段と考えるからである。かくして、使用価値を体現する登場人物の効能は打ち消され続ける。小説の結末について、著者は辛口で、クレナム (Arthur Clennam) が債務者監獄から救われるのは、ご都合主義であり、空虚なクレナムはドリット老人と同類で、彼もまた長い監獄生活の果てに精神を病むはずの人間であるという。幸福な結末は、商売人でもあったディケンズが、読者の期待に応えたゆえであるとジャヴィーはいうが、それをいったらお終いではあるまいか。

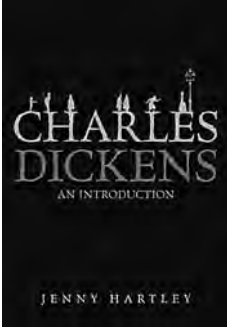
終章の第4章は『互いの友』を扱う。著者は、まず、ド・マン (Paul de Man) の修辞論を踏まえ、比喩的言語の一つであるメトニミーが資本のメカニズムに類似していると指摘する。メトニミーとは言語的な「細部」(item, detail) が無限に、かつ、ランダムに連鎖的に繋がるような比喩を指すが、資本主義における商品もまた、等価であるということを基準に、無限の連鎖を作ることができる。これを著者は、「資本のメトニミー的状态」(metonymic process of capitalism, Jarvie 122) と呼ぶ。等価ならば、商品はなんでもよく、『互いの友』においては、たとえば、リジー (Lizzie Hexam) の父がテムズ河から引き揚げる死体は、ある貨幣価値があり、それはリジーが摂取する飲み物と肉にも変わりえるし、ボフィン (Nicodemus Boffin) が有する塵芥の一部にもなりえる。なるほど、作品の全景を見渡すなら、そこには等価である可能性のある死体、飲み物、肉、骨、ゴミ、糞、ボロ切れ、石炭、鉄屑類、等々が無限のランダムな連鎖を形作るのを見ることができる。

では、メトニミー的に連鎖する商品の無秩序な乱雑さ (mess) からどうしたら人間は脱出できるか、言い換えると、人間はどうすれば、専制的な資本主義から解放されるのが、『互いの友』が提示する中心課題であると著者はいう。これに対する試金石となったのが、ベラ (Bella Wilfer) とユージーン (Eugene Wrayburn) である。ベラは養父ボフィンのたくらみに満ちた薫陶を経て、お金がすべてではないことに気づき、反資本主義者に改宗したように見える。しかしこの改宗は実はボフィンによって破壊されている。なぜなら、ボフィンはベラを「燦めく真の黄金」(true golden gold) と呼び、彼女を交換価値の世界に連れ戻してしまうからである。のみならず、ベラには「家庭の天使像」が押しつけられ、夫の所有物と化しており、ベラの改宗の金メッキはたちまちその素地 (女性という商品) を露呈させる。

ユージーンはヘッドストーン (Bradley Headstone) から暴行を受け、テムズ河に投げ込まれるが、河からリジーによって救出され、彼女と結ばれる。ユージーンは、文字通り「復活・再生」する。「結婚」や「家庭」という使用価値を認めた点で、ユージーンも資本主義から脱出できたかもしれない。しかし、著者は、セジュウィック (Eve Sedgwick) を援用し、ユージーンがモーティマー (Mortimer Lightwood) という男友達と親密すぎ、ホモセクシュアルな傾向を持つことを問題視する。ホモソーシャルな男性が異性と結婚しても、それはやはり単なる見せかけなのだ。かくして、ユージーンの改宗にも疑義が呈される。

本書は単調ともいえるパターンで貫かれている。資本主義もしくは貨幣という交換価値から脱却しているように見えるディケンズの登場人物たちは、みな、うわべだけで、偽物だという否定的解釈である。

でも、そもそも私たちは資本主義から逃げることができるのだろうか。商品のない世界で生きることができるだろうか。本書を読みながら、私は「貨幣」という冷厳な現実と対峙せざるをえなかった。



Jenny HARTLEY,

Charles Dickens: An Introduction

(x + 151 頁, Oxford: Oxford University Press, 2016 年,

本体価格 £ 10.99)

ISBN: 9780198788164

(評) 木村晶子

Akiko KIMURA

ディケンズ・フェロウシップ会員諸氏に、今更ディケンズの『イントロダクション』などは不要なはずだが、わずか 150 頁程度のこのコンパクトな本は、ディケンズ愛好者なら必ずや本棚に置いておきたくなる書物に違いない。と言うとまさに宣伝文句になってしまうが、読み終えて数々の小説の場면을反芻し、チャールズ・ディケンズという典型的でありつつも稀有なヴィクトリアンの人生に思いをはせ、改心したスクルージの歓喜のお裾分けにあずかるような気持ちになるのは私だけではないだろう。(ちなみに表紙と裏表紙にはスクルージと判別できる 8 ミリほどのシルエットのイラストがある) そうかと言って、本書は単に心温まる入門書というわけではない。あくまでも一般の読者や初学者を対象にした体裁をとりながらも、カバーに記された Claire Tomalin と Tony Jordan の賛辞のいずれにも‘insight’という言葉が使われているように、学術的大著にも匹敵する深い洞察に満ちた書物である。

著者は、2013 年から二年間ディケンズ・フェロウシップのプレジデントを務め、2012 年出版のディケンズ書簡集の編集の他、*Charles Dickens and the House of Fallen Women* (Methuen, 2008) を著したローハンプトン大学名誉教授である。思わず読みたくなる数々のコメントの背景には、ディケンズ文学に関する造詣の深さのみならず、作家の複雑な心理を浮かび上がらせる絶妙な距離感とそれを平易な表現に置き換える技と配慮が感じられる。その具体例に関しては、以下各章の内容を紹介しつつ見てゆきたい。本書は作家の生涯と作品を時系列でたどるという入門書にありがちな方法ではなく、中心となるテーマをいくつか設定し、複数の作品による例証を含めて章ごとに解説する形をとっており、巻末の簡潔な年表と厳選された参考文献リストにも読者への配慮が見られる。

第一章“More”は、ディケンズ文学で最も有名なセリフ、“Please, sir, I want some more.”、すなわち救貧院でオリヴァー・トゥイストがおかわりを要求する

場面の引用から始まる。(そう言えばディケンズ・ミュージアムでもこの場面のティータオルが売られていた)この場面から読み取れるものは何なのかという問いかけから本書はスタートする。ブラックコメディ的要素に加え、異種の多元的語りと枠組み——語り手、少年たち、オリヴァー、救貧院の制度が次々と展開するこの場面は視覚的効果を計算され尽くした演劇的タブローでもある。この当時のディケンズは25歳直前で『ピクウィック・クラブ』によって人気作家としての名声を獲得し始めていた。「ロケットのように」(8)猛スピードで執筆し、私生活でも長男の誕生に恵まれたが、激しい頭痛に苦しんで大量の服薬をしていることを親友 John Forster に漏らしてもいた。「ディケンズは何事も中途半端にはせず、すべてに徹底していた」(8)のである。

フェイギンの二面性というわかりやすい導入によって、矛盾や対立が作家の想像力を刺激し、誇張を真骨頂として相反する両極からの視点がディケンズ文学の特色であることが語られる。また、『オリヴァー・トゥイスト』にはサイレントだけでも19本の映画化があり、自らも救貧院経験をもつチャップリンのお気に入り小説だったことや、ディケンズ文学の映画的特質について、かの映画監督エイゼンシュタインがモニタージュやディゾルヴの技法を用いてこの小説を分析したことにも触れられている。

第二章“Public and Private”では、「自らの内的矛盾によって過剰な自己表出と隠蔽という両極を余儀なくされた」(18)ディケンズの人生の光と影の交錯が浮かび上がる。父の借金のためにわずか12歳で靴墨工場の労働を強いられたトラウマはあまりにも有名だが、自伝的色彩の最も濃い『デイヴィッド・コパフィールド』における子供と回想する大人との二重の視点は革新的であり、この小説がフロイトの愛読書だったことも当然だと指摘される。我が子に対してすら感情を隠してしまう自分の性癖の原因だとディケンズ自身が考えていたマライア・ビードネルをめぐる失恋経験、キャサリン・ホガースと結婚しつつも、彼女の17歳の妹メアリの急死という喪失体験といった〈影〉を抱える一方で、20代ですでに名士となった彼はますます〈光〉を浴びてゆく。10人の子供たちの誕生、小説家、雑誌編集者としての目覚ましい活躍、慈善活動、演劇熱、海外旅行熱、公開朗読といった〈光〉の人生。その陰で隠され続けた、次女と同年の女優との不倫関係、妻との別居、九死に一生を得た鉄道事故のトラウマといった〈影〉の部分が解説され、1870年に脳卒中で亡くなるまで常に彼が全力疾走を続けたことが再確認できる。

第三章以降は、ディケンズ文学研究の基本となる視点によって構成されている。第三章“Character and Plot”では、名があるだけでも約二千人も登場人物における、名前、身体・容貌の重要性が指摘される。これらはしばしば論じられてき

たが、“For Dickens, the body cannot choose but signal.” (45) という短い文には深い洞察力が感じられる。そして生物と無生物の境界、その連続性と不連続性に魅了され続けたディケンズが、人間を物あるいは動物に、また逆に物を人間に転じることに興味を抱いたこと、境界の消失は「都会的特質」でもあることが、『互いの友』や『荒涼館』の情景描写によって説明されている。さらに彼にとっては動的であることが生命力の証であり、「動けない身体」をもつミス・ハヴィシヤムの悲劇の例に続いて、事物を生命力で満たそうとしたのが彼の雑誌『ハウスホール・ワーズ』であり、ヴィクトリア朝消費文化のモノたちの物語が読者を惹きつけたと指摘される。登場人物から文化論に軽やかに筆を移す展開は、著者ならではのと言えるだろう。

この後は、ディケンズ擁護論とも受け取れる部分である。善良すぎる、あるいは邪悪すぎる人物たち、特に天使のような女性の人物造形に関する批判に対して、著者はエステルやアグネスの例を挙げて複雑な女性像も見出せると反論する。“Dickens never does just one thing.” (57) と語る著者は、ディケンズの創作における多重性について「リアリズムがアレゴリー、ロマンス、宗教的寓話と融合している」(57) と指摘する。悪役は「ディケンズ自身の内面にある消せない炎」(58) と関連づけられる。偶然に頼りすぎるプロットについても、読者の感情を揺さぶるサスペンスやジャンル混淆の面白さ、過剰なメロドラマへの傾倒が彼には重要であり、彼にとってのプロットの意味は、「結びつけ、関係づけること、それによって、失われたもの、無秩序なもの、異質のものが結びつき、作品の宇宙の『全体の構図』において各々の位置が最終的に明らかになること」(65) と結論づけられて、本章は閉じられる。

第四章“City Laureate”では、「英文学における最初で最高の都市文学の作家」として「都会生活を賞賛した最初の作家であると同時に、その恐怖を探った最初の作家でもあるディケンズ」に焦点が当てられる(66)。彼は「憧れのゴールと同時に奈落の底、エネルギーの源と同時に死の源でもある」(67) 巨大都市ロンドンの二面性を探求し、リアルなものと同様にロマンティックなものとの共存を描いたと語られる。しかし1850年代までには彼はロンドンに疲れ、『マーティン・チャズルウィット』の〈都会に出てくる青年のモチーフ〉は、晩年の『大いなる遺産』に至ると暗いものになり、ロンドンの子供たちを危険にさらす街、暴力と恐怖の空間ともなる。歓楽と消費、演劇的な華やかさの裏に闇を抱えた空間というディケンズのロンドン、作家自身の姿と重なりと著者は指摘する。

第五章“Radical Dickens”は、権力の濫用を生涯憎み、ラディカルであり続けたディケンズを描く。『ニコラス・ニクルビー』における児童虐待、多くの作品で描かれた救貧院の問題などの文学を通じた社会批判にとどまらず、「人民を代

弁する抗議の声となることが、彼には適していた。彼は戦闘態勢にあるという感覚が好きだった」(94) のであり、講演でも社会の弱者を犠牲にすることに抗議し続けた。『荒涼館』の執筆が開始されたのが大英博覧会開催の1851年であるのを見ても、大英帝国の栄華とされる時期がディケンズにとっては暗い時代の始まりだったと語られる。また、社会悪の根源として階級制度に焦点が当てられてゆき、「『リトル・ドリット』は『資本論』より扇動的な本だ」としたジョージ・バーナード・ショーの言葉も紹介されている。こうした殺伐とした現実を逃れる空間は家庭だが、ディケンズの文学には幸福な家族はほとんどなく、多くの家庭が機能不全の状態に陥っており、むしろ血のつながりのない疑似家族の方が深い絆で結ばれていると著者は指摘する。

興味深いのは、著者の議論が社会的次元での過激さから、カーニヴァルへの傾倒、狂気や夢や幻覚への関心に展開する点だろう。精神病院を見学した彼のエッセイは有名だが、小説にも精神を病んだエクセントリックな人物が数多く登場する。ディケンズの「言語そのもののカーニヴァル」(112)がこの悲惨な現実に抵抗し、精神の牢獄を破るものだったと本章は結ばれている。

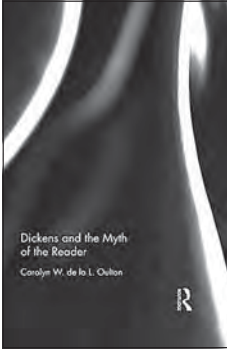
最終章“Dickensian”の冒頭では、OEDに1856年初出として登場するこの単語が多くの相反する意味をもち、華やかな陽気さだけでなく、貧困、不正、都会の汚さにも用いられること、文学様式としては次第に軽蔑の意味を強めることが説明される。しかし、「ディケンズらしさ」とは仲間と喜びを分かち合うことでもある以上、彼のエネルギーは常に人を惹きつけずにおかないと著者は主張する。その好例が『クリスマス・キャロル』であり、女王夫妻に影響を受けた1840年代前半のクリスマス人気と相俟って愛されたこの作品にかなりの紙幅が割かれている。「凝縮の奇跡」(117)として『クリスマス・キャロル』を賞賛する著者は、その文体、幸不幸の両極を表現する情緒性、事物も含めたすべてに溢れるエネルギー、子供時代に戻る旅の重要性について言及し、その情緒的温度を支えているのが口承性(oralty)であるとする。これは「声に出して読むための本」(119)であり、実際1853年の最初の公開朗読の作品であり、1870年3月の最後の公開朗読まで最も人気のある作品だった。彼にとって公開朗読は読者と触れ合える場であり、聴衆を目の前で笑わせ、泣かせることは大きな意味をもった。人が好きだった彼にとっては登場人物すら現実の仲間であり、小説を書き終えて彼らと別れるのは辛いと語っていたという。

最後にはポストコロニアルの視点を含めた海外での受容について述べられている。「よかれあしかれ英国らしさの世界的シニフィアン」(126)を担った彼の作品が、植民地をはじめとする海外で愛されると同時に帝国主義の道具とも見なされたこと、それでも虐げられた者の代弁者としての本質は変わらないことが

説明される。ただし著者の擁護はそれほど単純なものでもない。ドンビーの傲りを皮肉の一節を引用してディケンズの資本主義・帝国主義批判を示唆しながらも、著者は「しかしディケンズ自身のビジネス本能もドンビーと似たり寄ったりではなかったか？」(127)という一文を挟むのである。

ドストエフスキーが彼の愛読者だったのは有名だが、他にもトルストイをはじめ多くの著名なロシアの作家が彼の詩的・神話的想像力に影響を受け、中国では20世紀初期から翻訳されて社会改革の旗手として人気を博したという。本国では20世紀初期にブルームズベリー・グループによって一度は葬られたものの、労働者階級の読者からは常に愛され続け、1940年代に再評価されて以降、様々な批評理論を適用しうる文学となっている。多くの翻訳、翻案、映像化によってディケンズ文学が「グローバルなことば」(131)となったことは、その柔軟で可変的な特質を示していると著者は指摘する。お馴染みの登場人物が隣近所で暮らす設定のBBCの連続ドラマ『ディケンジアン』(2015-16)は、「あくまでも愉しくというディケンズ翻案の大原則の好例」(133)だろう。本書はチェスタトンの彼への賛辞、「因習的なヴィクトリア時代の中心で燃え盛る炎と輝かしい変容」を最後に引用し、「その炎はまだ今日も赤々と燃えている」(134)と結ばれている。

同じくテーマ別の章立てによる入門書としては、Jon Mee の *The Cambridge Introduction to Charles Dickens* (Cambridge UP, 2010) が思い浮かぶ。娯楽性、言語、都市文学、ジェンダー、アダプテーションという五つのテーマを通して「限りなく増殖するかのような彼の想像力」(Mee 99)を示すこの本はオクスフォード大学の授業を出発点としており、大学の文学教育の視点に立っていた。それに比べて本書はより一般の読者向けであり、本質的な矛盾を抱えながら、それゆえに偉大な存在であるディケンズ像を一層実感させてくれる。ただ評者は、本書の数々の小説の引用を音読してみて、著者の語るディケンズの文学の“orality”の重要性に納得しながらも、外国文学研究者としての自身の限界も感じてしまった。また日本の英文学の教員としてはこうした『イントロダクション』は確かに有難いものの、『クリスマス・キャロル』をディズニー原作と勘違いし、邦訳の『大いなる遺産』ですら長すぎると感じる学生たちにどう役立てればよいかは正直わからない。とはいえ、あれほど反体制的精神に満ちた彼の作品がモダニズムにおいては唾棄すべき過去の遺産となりつつも、当然ながら名誉を挽回して久しい現在、まさにポストモダン以降の時代にふさわしい文学として今後ますます評価されることを本書は確信させてくれる。ディケンズ文学に溢れるエネルギーのもつ深い意味と、牢獄であると同時に祝祭空間でもありうる現実を豊かに生きる力を再認識させてくれる本書は、ディケンズへの愛に満ちたオマージュと言えるだろう。



Carolyn W. de la L. OULTON,
Dickens and the Myth of the Reader
(viii+189 頁, New York : Routledge, 2017 年,
本体価格 £110.00)
ISBN: 9781138230323

(評) 木島菜菜子
Nanako KONOSHIMA

本書はディケンズがとった読者との関係構築の方法について論じたものである。ディケンズが手紙だけでなく作品の序文や作品自体を読者に語りかける場と考え、そうした場をいかに利用し、読者と作者である自分との間にどのように望ましい関係を築いていったかという点について、ディケンズの文章表現を分析することによって論じている。著者 Oulton の出発点にはそもそも次のような疑問があるようだ。ディケンズの作品には「ディケンズの読者」とも呼べる特定の読者像があるように思われ、それは「作家ディケンズの人となりに好感を持ち、その作品はこう読むものだということを知っている読者」であるが、そうした読者像が想定されていると感じるのはなぜなのか、という疑問である。Oulton はこの非常に興味深い問いから出発し、ディケンズの手紙や作品の中から読者に語りかけている箇所や作家としての自分の存在に言及した箇所などを分析することで、ディケンズの語りの手法を考察している。以下、序文から第 5 章まで各章の内容を紹介し、最後に評者の私見を述べたい。

序文 “Creating the Reader and Writing the Writer” は、ディケンズが読者に求めたものを分析している。筆者によれば、ディケンズはその作家活動を通じて「理想の読者」を作り出している。ディケンズはそもそも自分自身にも十分に表現しきれないものを想像するように読者に求め、経験を語る手段としての言語の限界に常に言及し、その限界を超えたところに想像をめぐらせるよう読者に働きかけている。筆者は「神話化」という言葉を用いて、作品の読まれ方を操作し、書き手としての自分に意識を向けさせるディケンズの手法を論じている。その中には作品を通して読者との繋がりを生み出すことも含まれる。例えばボズは会話調で語り、読者にロンドンの街角でばったり出会う可能性のある人物と感じさせ、実際には会うはずのない読者に親近感を抱かせる。そのような読者はディケンズが作り出す世界に積極的に関わり、作品を能動的に読み、作家の意図に答えてくれ

のような読者なのである。

第1章“Reciprocal Readers and the 1830s-40s”は、ディケンズの初期の作品の中から主に次の各作品における作家としてのディケンズの姿勢や態度と読者の役割について順に論じている。『ボズのスケッチ集』では初めのうちは文章を読んでもらう者としての立場を取り、読者をパトロンとして扱う。作者と読者のその関係は次第に変化を遂げ、『家庭の言葉』発行の時には読者の役割は「舞台裏」を垣間見ることのできる特権的な観察者としての役割にシフトさせられている。『オリバー・ツイスト』の語り手は、読者が自分の実体験を踏まえて作品を読んでいることを想定している。そしてメタフィクショナルな語り手の介入が、小説における書くことと読むことや、想像の世界と現実の世界との境界を曖昧にしている。『ニコラス・ニクルビー』までには、ディケンズの作家としての地位は確かなものとなっており、ディケンズはその地位を主張するよりも読者の反応を試すような戦略をとるようになる。読者が読んだものに対してどのような反応をするかによって読者自身が判断されることを語り手は示唆している。読んだものによって我々は作られるという考えが最も端的に表されているのが『クリスマス・キャロル』である。この作品において読者は、幽霊によって断片的に明らかにされるスクルージの人生をつなぎ合わせる必要があり、ある一定の想像力を働かせることを求められる。ここでもこの行為は語り手によってコントロールされ、さらに語り手と読者の間を隔てる、作り話と現実世界との間の障壁が取り払われる。こうした語り口はボズのペルソナ、また多くの読者と同じくロンドンに住む実際の作者を思い起こさせる。そしてほかの読者や語り手と体験を共有することで、ディケンズの読者はすべからず「記憶という再生機能の恩恵」を受けられるという仕組みになっている。『マーティン・チャズルウィット』には、手紙のような文面の序文がつけられ、作者と読者の間に親密な関係が築かれ、読者は選ばれた文通相手としての地位に招かれている。そして折に触れて語り手は読者に想像的な場面をどのように解釈すればいいかを伝え、その見返りとして読者は作者に対するある種の期待を持ってもいいことになっている。しかしアメリカで著作権の問題に直面したディケンズは小説の外の世界において作家としての自分の姿や作品がいかに読まれるかということをコントロールできないという経験をしていた。本作においてディケンズは書き言葉に対する暗黙の不信感をあらわし、読者を一定の方向へ導こうという意図は変わらず持っていたものの、どのように作品を読めばいいかという自分の指示に読者は従わなかったと感じることとなった。その後の『ドンビー父子』では、文字や書物が様々な役割を果たすようになり、作者が読者の反応をコントロールすることの難しさが表されるようになる。

このようにディケンズは作家活動の初めから読者を個人として想像し、自分の

作品に対する読者の反応を形作った。自分と読者の関係を神話化しようと試みる中で、ディケンズは語り手というペルソナを借りて作品のまわりに顔を出し、手紙とフィクションの垣根を取り払うようにして読者に直接語りかけた。こうして作られる理想的な読者は、本文に表現されないままになっていることや語り手が表現しきれないことを自力で想像し補うよう求められるが、それは『デイヴィッド・コパフィールド』において顕著になる。

第2章 “The Hero of His Life” は、*Dickens Studies Annual* 第43号に掲載された論文 “‘Shall memory be the only thing to die?’ Fictions of childhood in Dickens and Jerome K. Jerome” に重複する部分があるものだが、初めに伝記に対するディケンズの考えを考察し、その後『デイヴィッド・コパフィールド』の語りについて、作者の姿がどのように神話化されているかを論じる。ディケンズは『家庭の言葉』の寄稿者でもあった女性詩人 Adelaide Proctor の死後、その作品 *Legends and Lyrics* に伝記的な序文を付している。ディケンズはこの文章で、感傷的になることなく、人格的にも職業的にも作家のあるべき姿を提示している。この伝記的序文は、作家が死後も一般読者に対して自分の印象をコントロールできること、こうした伝記が、作家がのこした作品の評価を形作る部分があると、ディケンズが考えていたことを示している。

『コパフィールド』の語り手が、自分はこの物語の主人公になるか否かと述べる有名な冒頭は、この語り手が読者に対する影響力を物語冒頭から行使していることを表している。語り手はディケンズ同様、書くという身体的行為への言及を通して、読者に作家の地位を繰り返し思い起こさせる。そして、読者に次のことを受け入れさせている。つまり、小説家というのは作品を読むことを通して知ることができる対象であり、本人が読者の関心を引くように持ち出すのでなければ、その作品の外にある何かによって判断されるべきものではないということである。こうしてディケンズは作家としてのペルソナをコントロールし、本書はディケンズ自身の神話化の一部をなすものとなったのである。

第3章 “First-Person-Narrators and Editorial ‘Conducting’: Limited Intimacy and the Shared Imaginary” は、ディケンズが『コパフィールド』以降の小説において、信用のおけない一人称の語り手を精巧なものにしていき、公私の境目を曖昧にし、作家の経験を「文学的神話」として複雑化していくと論じる。この公私の境界はディケンズの手紙によっても崩される。ディケンズの手紙はこの時期からフィクション化していく傾向にあり、さらに読者は小説を私信として受け取るよう求められるもする。

一人称の語りでは、その語りの背後に人物がいるにもかかわらず、読者とその語り手との間には必ずしも親しい関係があるわけではない。読者は自分が、打ち

明け話を聞いている親友なのか、それとも単に覗き見をしているだけなのか、自分の立ち位置をはっきりさせられないことも多い。『大いなる遺産』のピップと読者との関係は、ピップの成長の過程によって変わっていく語り手の口調によって慎重に築かれていくものである。こうした一人称の作品においても読者と作者の関係のあり方は最終的にはメタテキスト的な序文を書く作者にゆだねられ、読者は物語の中に描かれる感情に共感しそれを広げていくよう求められるのである。

第4章“Decoding the Text”は、『リトル・ドリット』、『互いの友』、そして『エドウィン・ドルードの謎』を取り上げている。経験を表現し実証するものとしての書き言葉に対する不信を表しているのは一人称の語りだけではないとし、筆者は1850年代から60年代にかけてのディケンズの主な小説はいずれも文書や手紙の偽造や盗用への関心を表現していると述べる。『荒涼館』以降の小説は、書き手が意図しなかったように読まれ解釈される公私の文書が重要なテーマになっているのである。『リトル・ドリット』でも様々な形の読むことや書くことが大きな意味を持ち、登場人物は書かれた言葉をコントロールしたり解釈しようとしたりする。そして『互いの友』や『エドウィン・ドルードの謎』では、読むことと書くことがその人物の道徳性を示すだけでなく殺人にも関わることとなり、人物理解の極めて重要な鍵となる。

第5章“Afterlives”は、ディケンズの死後の評価に関して、特にフォースターによるディケンズの伝記とギッシングのディケンズ研究に焦点を当てて概観し、本書の結論をまとめている。フォースターは、ディケンズが自分の文学的才能よりも読者に対する責任感や現実世界に対する責任感を重視していたことを強調している、と筆者は述べる。

ディケンズの著作は想像的な行為としての読むことと書くことを意識的に結びつけることによって維持また管理されていること、そして主に手紙の形での読者との対話が執筆の過程に重要性を増していったことを本書は明らかにしている。ディケンズは時代を代表する人物であるが、その地位はディケンズ自身が常に意識していた読者の存在によって担保されている。ディケンズに特徴的なのは、理想的な読者層を「作り出す」ことである。その読者とは彼の小説を能動的に読み、その過程において道徳的な変貌を遂げる読者なのである。

以上が本書の概要である。ディケンズの手紙と創作との関係や、読者との関係はこれまでも論じられてきており、本書のディテールにはさほど新しいものが多いとは言えないかもしれない。特に第3章以降、それぞれの小説に関して筆者の論が展開される中では、小説の中に出てくる書くことや読むこと、書かれたものや読まれるものが分析され、それが自己表現にもなり道徳的なものにもなる一方で人を墮落させ不幸にさせるものにもなることなどが論じられるが、その議論

はさほど新しくは感じられない。そうした細部をディケンズの思い描いた理想の読者像に結び付ける論理展開は、特に一昨年の『年報』第38号に書評が掲載された *Reading and the Victorians* における Sheila Cordner の議論に類似するところもあるように思われる。その一方で、本書は近年のディケンズ研究の動向をふまえ、それを発展させたものであることは確かである。特に前半はディケンズの作家としての自己形成期における読者との関係を慎重に再考したという印象をうける。また、読者との関係構築の方法に焦点をあてることでディケンズの語り口の特徴の一端を分析したという点では Tyler らのディケンズの文体に関する議論を進展させたものとも言えるように思う。

評者の考えでは本書の特徴は、例えば女性にはワーズワスとクラブといったように、時に何を読むべきかまで教えてくれる作者の立ち位置と読みどころをきちんとおさえられる読者とが、書かれたテキストの中に「相互に」作られるという点を一貫して主張しているところにあると思われる。さらに、例えば『チャズルウィット』において語り手が想定している読者はおとぎ話やロマンスに長年親しんできてそこから自らの想像力を養った者であるなどと、読者への一見些細に見える呼びかけを分析することで、想定される読者像を明らかにしているところである。また第4章では、ディケンズが1840年代以降創作のプロセスを手紙に書くようになり、それらの手紙によって何層にもなるテキストが構成され、その中のどの層にアクセスできるかによって読者の階層ができるようになったこと、そして読者の中に、他の小説との関連によってテキストを読み替えたり新たな意味を発見したりできる者が生じ、階層的な読書というものが生じるようになったと筆者は論じており、こうして特権的な読者というものをディケンズが生み出していったという論理が評者には興味深く感じられた。

現在 Canterbury Christ Church University のヴィクトリア朝文学の教授である筆者 Oulton は自身、精力的な書き手であり、ディケンズに関係する本も複数出版している。それらの著作には出会われていなくても、本評の読者は昨年夏に *The Dickensian* に掲載された論文 “‘I write this with my hands in a basin of water’: Dickens, Letters and Readers” を読まれた方も多いと思われる。本書はその論点を拡大させているものと考えていただいてもいいと思う。ディケンズの手紙は、近年広く気軽に読まれる機会も増えていると思われるが、Oulton の議論は特に読者との関係とディケンズの語り口についてわかりやすい論点を提示するものであり、小説だけでなくそうした手紙の読み方にもより複雑な視点を加えるものだと言えるだろう。



新井潤美,
『パブリック・スクール——イギリス的紳士・
淑女のつくりかた』

Megumi ARAI,
Public School: Educating English Gentlemen and Ladies.
(215 頁, 岩波書店, 2016 年 11 月, 本体価格 820 円)
ISBN: 9784004316305

(評) 杉田貴瑞
Takayoshi SUGITA

文学作品に触れるとき、読者である我々は作品の背後にある言わば予備知識のようなものを必要とする。作品を生み出した作家の個人情報はもちろんだが、作品が作られた時代の社会制度や文化もその範疇に当てはまる。特に外国文学や時代小説など、読み手の立場から空間や時間が大きく離れた場合には、その必要性が増すことは言うまでもない。もちろん、そのような背景を知識として知らなくても、文学作品を読むことは可能であり、そのような楽しみ方もあってしかるべきである。しかしながら、背景を知っておけば読み応えが増して、さらに読書が楽しくなるというのもまた真実であろう。ましてや文学を研究するという立場からすれば、これはもう、必須の条件だ。ところが実際にそれらのことを調べようとすると、これまた一苦勞である。特に英国の場合には階級という非常にややこしい制度が立ちはだかる。「パブリック・スクール」という制度もその一部を切り取ったような存在と言えるだろう。教育の一形態であるにもかかわらず、外の人間にとっては(あるいは内側の人間にとっても)入り組んで実態が捉えづらい「概念」のような様相を呈しているのだ。本書『パブリック・スクール——イギリス的紳士・淑女のつくりかた』は、そのように混迷を極める実態を解明する際に一助となってくれるはずである。

本書は新書ということもあり、緻密な研究書というわけではない。「おわりに」にもあるように、「あくまでもパブリック・スクールの「イメージ」に焦点を当て、学校制度そのものや数々の教育法についての説明は最小限になっている」(214 頁)のである。それを前提に読み進めると実に多くの知識やそれを活かすヒントのようなものが発見できるはずである。本書は全部で 6 つの章から構成されている。以下、順番に本書の内容を概観してみたい。

第 1 章では、パブリック・スクールの原型である教会付きのグラママー・スクー

ル(現在のグラマー・スクールとは異なる)の紹介に始まり、現在の意味でのパブリック・スクールが成立するまでの過程を追う。本来中世において入門生をキリスト教へと改宗させる目的で作られたグラマー・スクールは、英国国教会の樹立を経て立身出世のための学校へと様変わりする。また学費の面でも慈善事業としての側面が強く奨学生が多かったが、次第に有償のアップパー・クラスの子供たちを受け入れるようになる過程も簡潔に説明される。このような近代までの変遷を踏まえた上で、オースティンの『分別と多感』やディケンズの『ニコラス・ニクルビー』といった小説におけるパブリック・スクールについての言及を参照して、「プライベート・スクール」との相違点から、なぜ「パブリック・スクール」という名称が定着したかなどの基本的な知識について書かれている。特に『ニコラス・ニクルビー』についての記述では、監査制度のない時代に作られたドゥーザボーイズ・ホールのようないかがわしい学校の存在の背後にある、家庭に置いておきたくない厄介な子供を学校に預けてしまおうとする保護者のエゴにまで批評のメスが届いている。また、現代では限られた上流の人間が通う学校というイメージが定着したパブリック・スクールが、本来慈善のために作られた学校であるという知識は歴史の皮肉な巡り合わせのようにも感じられる。同じ慈善という観点のもとに、一八六八年という近代の終わりまで少年と共に「貧しくて、健康でない老人」が同居するパブリック・スクールが存在したことも、現代ではすっかり忘れ去られてしまった事実として有益な情報であろう。

第2章と第3章では、ヴィクトリア朝期から20世紀前半にかけて、言い換えればパブリック・スクールのイメージが確立された時期について分析している。特に興味深いのは第2章において、いわゆる「学校物語」からパブリック・スクールの全体像を捉えようとしている点である。「学校物語」の代表とも言えるトマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』のあらすじを追う形で、監督生制度やスポーツといったパブリック・スクールの基盤が説明される。また学校や寮におけるファギング(上級生が自身についた下級生を使い走りに使うこと)などのしきたりや洗礼、それを乗り越えた生徒同士が相互に影響する様などが描かれる。さらに、これらの「学校物語」の読者が実際にパブリック・スクールに通っていたアップパー・クラスやアップパー・ミドル・クラスの子供たちだけでなく、それよりも下の階級にまで拡がっていたことにも言及する。『トム・ブラウンの学校生活』の他にもいくつか初期の「学校物語」に触れているが、いずれも教訓的な内容で、説教調の作品であったようだ。このように「学校物語」というフィクションの場を通じて、ヴィクトリア朝期から主に第一次世界大戦頃までに、パブリック・スクールの「賢い指導者のもと、どんな気質の学生であっても、互いに良い影響を与え合い、感化しあい、卒業する頃には立派な紳士となっている」

(58 頁) というイメージが確立されると論じている。第 2 章がパブリック・スクールの肯定的な側面を提示するのなら、つづく第 3 章では、その否定的な側面、つまり「裏側」が描き出される。この章では、ウィンストン・チャーチルの回顧録『わが半生』やキプリングの学校小説『ストーキーと仲間たち』、そしてアレック・ウォーの問題作『若さの機』などを題材に、つまらないラテン語の授業や鞭打ちのような刑罰、さらに生徒同士のいじめや同性愛などが紹介される。特に同性愛に関しては、最大のタブーであるとされながらも、多くの学校物語のテーマの一つとなっていたようである。それぞれの作品によってどこまで直接的な表現を用いるかなどのせめぎ合いがあったという指摘は、ヴィクトリア朝の性表現のタブー視などを念頭に置いても興味深い着眼点であろう。第 3 章の末尾に据えられた「パブリック・スクールの「裏側を描いた」作品は、そこが古典とスポーツが過度に重視される、閉ざされた、排他的な空間であることを強調している」(109 頁) との一文からも、前章とのバランスを保ち、パブリック・スクールの長所と短所を余すところなく見つめようとする公平な、そして何より批評的な著者の視線が垣間見られる。

ここまでの内容が、パブリック・スクールのイメージを解説しているとすれば、つづく第 4 章と第 5 章ではそれぞれ女子のパブリック・スクールとグラマー・スクールというパブリック・スクールだけではないイギリスの学校教育全体に目を配った内容となっている。まず第 4 章では女子のパブリック・スクールについて述べられている。そもそも十八世紀の終わりまで女子教育と言えば、結婚に必要な「たしなみ (accomplishments)」の習得を指した。そのためアッパー・ミドル・クラスの家庭では自家の娘を淑女に育て上げてくれる家庭教師の存在が必要だった。その家庭教師を育成する場として、女子のパブリック・スクール(あるいはプライベート・スクール)はスタートしている。しかし、経営上の観点などから裕福なアッパー・ミドル・クラスを取り込む工夫がなされたり、その上の階級であるアッパー・クラスにおいても教育への意識改革が起り、自家の娘をパブリック・スクールに入れるようになったりと、次第に高度な女子教育を行うパブリック・スクールが現れるようになる。このような変革は二十世紀に入ってから本格的に行われたものであり、それ以前の時代では、女子の教育に対する考え方は未熟であった。本書ではその改革初期に女子のパブリック・スクールの創立者たちが直面した困難についても少し触れられている。これらの女子のパブリック・スクールでは伝統的な男子のパブリック・スクールを模した教育が施されていたという指摘も興味深い。男性的な女子学生の存在や男子校における学校物語を模倣した女子校の学校物語などは文化的な研究の側面からも捉えられそうな問題である。評者などは、女子校において生徒同士が名前を男性名に変えて呼び合

う(たとえば「シャーロット」を「チャーリー」など)という箇所を読んで、デイヴィッドを「デイジー」と呼ぶステイアフォースの存在などが念頭に浮かんだ。

第5章では、グラマー・スクールの解説と共に現代にまで残るイギリス階級社会の概観が述べられる。グラマー・スクールは地元の貧しい少年にラテン語を教えるために教会が設立したグラマー・スクールに起源があるという。それらの一部が基本的には学費を取って、ミドル・クラスの子供たちに教育を施すようになるのが、のちのグラマー・スクールである。本書の分類で言えば、「アッパー・クラスおよびアッパー・ミドル・クラスの子弟を教育する寄宿制のパブリック・スクール」と「ミドル・クラスの子弟により実践的で近代的な教育を与える通学制のグラマー・スクール」(145頁)ということになろう。また時代が進むにしたがってグラマー・スクールは奨学生という形でワーキング・クラスの子弟にも門戸を開くようになる。重要な点としては、このグラマー・スクールが常に階級を意識しなければならぬ教育の場であるということが挙げられるようだ。この章でもキングズリー・エイミスの小説『ラッキー・ジム』(一九五四年)を説明材料として扱っているが、ロウワー・ミドル・クラス出身でイングランド北部のグラマー・スクールを出た主人公を通して、グラマー・スクール出身者ならではの苦悩が描かれる。それによると、パブリック・スクールに憧れを抱いて、アッパー・クラスの友人を得ようとしたり、時には教養の違いから階級の差を痛感して挫折を感じたりというグラマー・スクールの生徒や出身者の姿はステレオ・タイプの造形として受け入れられている。すでに現代においてグラマー・スクールという制度自体は廃止されているが、著者はこのようなステレオ・タイプのグラマー・スクールのイメージが文化として存在し続けると主張する。

最後に第6章では、現代のパブリック・スクールについて述べられている。二十世紀も半ばになると、時代の変化と共にパブリック・スクールは強い逆風にさらされることになる。一九四四年の教育に関する法律が施行されて公立の中高等学校が整備されると、私立のパブリック・スクールの存在が脅かされるようになり、スポーツだけでなく学力の向上(ラテン語やギリシャ語ではなく、英文学や科学系の科目に重点が置かれる)に注力することや、共学化を図るなどして生き残り策が模索される。さらに、一九六四年に労働党が政権を担うようになると、ますます苦境に立たされるようになる。パブリック・スクールだけでなく、公立のグラマー・スクールが廃止されてコンプリヘンシヴ・スクールに変更されるなどの教育制度の転換が図られる。一九八〇年代になると当時のサッチャー政権によるコンプリヘンシヴ・スクールへの援助金削減などの政策によって、パブリック・スクールは巻き返すものの、労働党が再び政権を奪取すると、それらの政策も廃止になり、つかの間の好況に終わる。またこのような政策論争による影響だ

けでなく、寄宿制という制度そのものへのニーズの薄れや排他的な学校としてのイメージの悪化という点でも、パブリック・スクールの置かれている状況は芳しくない。だが、著者はそのような現状を踏まえた上で、第6章の末尾を次のように締め括っている。「パブリック・スクールはこのように様々な変貌をとげてきており、その伝統や精神も変化してきた。そのイメージは今では批判や揶揄的にもなるし、今後生き残るためにはまた様々な困難があることは容易に想像できる。しかしそれでも、パブリック・スクールがイギリスの文化において今でも大きな存在であり続けることは変わらないだろう」(207頁)。

このように本書は、パブリック・スクールについての基本的な情報や背景を提供してくれるだけではなく、その先の思索への窓口ともなってくれている。たとえば第1章において、慈善活動とパブリック・スクールの成立の関連が語られるが、これなどはイギリスについて研究する者にとっては面白い切り口であるはずだ。また、第5章のグラマー・スクールと階級の話についても同様である。このように、パブリック・スクールをイギリスの社会や歴史を映し出すある種の「鏡」として捉えることでも、本書は十分に楽しめる。

それにも増して本書の特徴は、何よりパブリック・スクールの「イメージ」をターゲットにするという性質上、従来の統計的な数字や図表などのデータで埋め尽くされるパブリック・スクールの解説本とは異なるという点にあるだろう。積極的に文学作品や演劇、映画との関連が指摘されるのである。それも参照される作品は、ディケンズやオースティンのように一流の作家の作品から『トム・ブラウンの学校生活』のような大小様々の学校物語、さらには、カンヌ国際映画祭でグランプリを受賞した映画『If もしも…』など多岐にわたっており、著者の関心領域の広さを表していると言えるだろう。これらの作品にも思いを馳せながら、読者はすんなりとパブリック・スクールの「イメージ」を構築できる。それは、まるで一つの物語を読むかのような感覚に似ていると言っては言い過ぎだろうか。そもそもパブリック・スクールという概念自体、物語のような性質を帯びているのかもしれない。第3章に「イギリスにおいては、今まで書いてきたように、パブリック・スクールに無縁の大多数の人々の間でも、「パブリック・スクール」のイメージがよくも悪くも形成されている」(109頁)と書かれているように、パブリック・スクールは、人々の間で作られたフィクションのような側面も持ち合わせている。実際、著者自身も「おわりに」のなかで執筆の動機が子供の頃の文学体験から生まれた「いつしか「イギリスの寄宿学校」に行きたいと思うようになっていた」(211頁)という願望に根差していることを告白しているが、これは本書を理解する上で非常に重要な一文である。その一文に込めた思いを証明するように、本書はパブリック・スクールという「読み物」を憧れのまなざしと

共に研究者としての批評眼も交えて解説した優れた一作である。



田中孝信・要田圭治・原田範行 (編著)
『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』
Takanobu TANAKA, Keiji KANAMEDA, and
Noriyuki HARADA eds.
Sexuality and Victorian Culture
(412頁, 彩流社, 2016年12月, 本体価格 4,200 円)
ISBN: 9784779122774

(評) 西垣佐理
Sari NISHIGAKI

「セクシュアリティ」という言葉は、21世紀に生きる我々にとっていとも容易く語ることができるが、ヴィクトリア朝時代は「リスpekタビリティ」の名の下に最も忌避され、隠蔽される一方、子供の数が多く、ポルノグラフィや売春婦が数多存在していたという、矛盾した状態だったのは研究者には周知のことである。本書は、今日でもなお影響を及ぼしているヴィクトリアン・セクシュアリティという問題に9名の論者が真正面から向き合い、当時の隠蔽体質な風潮に異議を唱え、様々な角度から性にまつわる言説を明るみにする試みである。以下、紙面の許す限り章ごとに概観し、最後に簡単に私見を述べることにする。

「はじめに」で、編者の一人である田中孝信氏が「性の言説が横溢している」(11)と述べ、その多様な性の様相をヴィクトリア朝文学の流れと合わせて詳細に論じている。この部分を読むだけでも、当時の言説の変遷のみならず、その後の時代にも影響を及ぼしたのが容易に分かるようになっている。

第1章、要田圭治氏による「マルサス以降——性は個人と人口をつなぐ」では、「人間を人口という量的概念で表すことを試み」(65)、人口増の原動力として性欲があると考えたマルサスの『人口論』を基に、マルサス以降に登場した思索家・実践者であるケイ、ギャヴィン、サウスウッド・スミスらの調査や思想を比較検討している。各自異なる視点で下層労働者階級の生活実態について記録する際、統計を用いて都市問題や人口増に絡む性行動の問題を把握しようとした。例えばケイは教育が労働者の状態を改善する手段として有効だと考え、かたやギャヴィンは労働者の住居を重要視し、道德問題と居住形態が密接に関係していると語る。その際私生児の統計を用いることで、労働者階級の性現象が住居と密接に関係していることを可視化させた。また、サウスウッド・スミスは、人間はその人がおかれた環境によって作られるという環境主義でもって、マルサスを批

判した。つまり、マルサスは産業革命による工業化によって、農業人口が減少し食料が増えないとみていたが、サウスウッド・スミスは創意工夫と英知によって作物増産の可能性を考えることで、人間の英知・理性が欲望より勝ると考えたのだ。いずれにせよ、彼らはフロイト登場以前に性を観察、分析し、理性で理解しようとする試みだったのだ。

第2章の「〔不適切な〕議題と急進派ジャーナリスト、イライザ・ミーティヤード——一八四七年スプーナー法案(誘惑・売春取引抑制法案)の行方」で、閑田朋子氏は1840年代後半当時、社会悪と見なされ「不道德な」話題ゆえに議題にあげることすら難しいとされたスプーナー法案の発議から否決に至るまでの流れを、イライザ・ミーティヤードがいかに取り上げたかを、彼女の記事と議会議事録を通して論じている。そこでは、「誘惑」という言葉が「売春」につながるものであり、ゆえに「誘惑」という文言が法案成立の可否に物議を醸し出した。ミーティヤードは「スプーナー議員の法案についても申す」という記事で、基本的には「女性の保護」という記事の論旨と同様ながら、資料を集めて取材し、さらには議会議事録以上の情報を提供し、また、専門家の意見や統計を参照して、議論に説得力を持たせようとする。最終的に法案は否決されてしまうが、決議6日後に掲載された彼女の短編は、一見現実離れしたシンデレラ・ストーリーであるものの、彼女の記事を念頭に置いた場合、強烈な皮肉ともなり得るのだ。ミーティヤードは1840年代という、売春という言葉が女性には知らないとされた時代においては非常に急進的な女性であったと言えるだろう。

第3章、侘美真理氏による「模倣する身体——『アグネス・グレイ』における動物・身体・欲望の表象」で、「ヴィクトリア朝の道徳性を堅持している」(123)ゆえにあまり注目を集めなかった『アグネス・グレイ』は、作品におけるリアリズムとロマンティズムの間に欲望が生じると論じる。そして、何気ない日常描写、中でも作品に登場する様々な種類の動物が、登場人物の内的資質や行動規範の指標となる。その背景には「野蛮」と「教養」など、様々な二項対立の図式が存在しており、アグネスは、勤め先の家族たちの動物への接し方から「身体」と「精神」の関係を指摘した上で、動物の身体とのアナロジーを通して倫理的に統制された身体を目指す。そうした「中性的」なガヴァネスの身体には収まりきれない彼女の、力やセクシュアリティを帯びた身体が存在を、「模倣」と「欲望」の観点から読み解こうとする。『アグネス・グレイ』において、「セクシュアリティ」という問題はおそらく「肉体」そのものと密接な関係にあるが、それは中産階級的な「身体」に対する抑制された眼差しによってではなく、「心」や「感情」とは切り離された「肉体」そのものへの眼差しから目覚めたと言える。「心」と「肉体」の想像的な一致という一種ロマンティックな「身体」に対する強い関

心がアナロジーや換喩として作用し、それが「テキスト」の「身体」の形成そのものにも寄与している可能性を考えると、その「テキスト」に何かしらの「欲望」が潜んでいるのだ。

第4章の本田蘭子氏「髪と鏡——メドゥーサとしてのパーサとそのセクシュアリティ」で、本田氏はまずエドワード・バーン・ジョーンズの画布《不吉な首》に登場する水面に映るメドゥーサと、それをのぞき込むペルセウスとアンドロメダの構図を基に、『ジェイン・エア』のパーサの悲劇的運命を様々なモチーフ——長い黒髪や眼差しから論じる。画布で描かれる3者の有り様は、そのままロチェスター、ジェイン、パーサの関係と象徴的に類似している。パーサの持つ豊かな長い黒髪は、元々ロチェスターを魅了したが、やがてメドゥーサの髪が蛇に変えられてしまったことから髪＝セクシュアリティの象徴ともなり、最後にはその髪によって、人間か獣なのか判別がつかなくなるという両義性に満ちたものとなる。メドゥーサの眼差しは人間を石化させるが、パーサの眼差しも同様で、結婚式当日にロチェスターを象徴的に石化させている。そして、パーサ自体が性的欲望そのものという形で表象されることにより、当時の社会で忌避される存在となってしまうのだ。また、『サルガッソーの広い海』のアントワネットの鏡の分析を通して、髪を見るにしても、鏡を見るにしても、いずれも切り離せない眼差し、視線の問題をこのメドゥーサのモチーフと絡めて用いて論じている。

第5章「欲望の封印から充足の模索へ——エリス・ホプキンスとヴィクトリア朝中期の性の葛藤」で、市川千恵子氏は、1860-80年代までの性の二重規範の問題に対して声を上げた女性運動家、エリス・ホプキンスの社会浄化運動と小説『ローズ・ターケンド』でヒロインが自己を取り巻く心的かつ身体的暴力を克服していく際の規範への従属と個人の欲望充足との葛藤の様相を検証している。ホプキンスは、労働者階級の男性たちに向かってキリスト教的価値観から強化を試みるが、その後家庭という私的空間に彼女の視点が移動するにつれ、家庭こそが「重要な浄化の場」(199)であると位置づけ、その浄化の担い手を女性として、当時のイデオロギー規範を保持しつつ、家庭内での女性優位を前提として彼女たちに家庭空間から社会浄化運動への参画を呼びかけるといったものである。また、売春に関しても、ホプキンスは男性に対する性的清潔さの啓蒙と女性たちの救済を主要な活動内容としていた。また『ローズ・ターケンド』では、ホプキンスはヒロインの欲望の封印と充足を描くなかで、性差に基づく抑圧構造を攪乱し、浄化しようと新たに模索しているのである。

第6章「現代バビロンの乙女御供——ウィリアム・T・ステッドの少女売春撲滅キャンペーン」で、川端康雄氏は、廃案の危機に瀕していた刑法改正案を議会で可決させるべく、社会に注意喚起を促し、議員たちに圧力をかけようとス

テッドが1885年に『ペル・メル・ガゼット』紙に掲載した「現代バビロンの乙女御供」と題した一連の記事を詳細に検討し、そのセンセーショナルでメロドラマティックな語りと、最終的に刑法改正法の制定に寄与した役割を論じている。ステッドは、ギリシア神話のミノタウロスのエピソードに端を発して、当時の少女売春の実態を文学的に暴露する。一連の記事はスキャンダラスな見出しから始まり、内容も自らの取材に基づくものだとすることで、非常にセンセーショナルな内容であり、読者の関心を集めた。ステッドが記事を仕上げるために自ら少女を雇ったことで、「やらせ記事」になったこと、また、少女売春婦と同様に存在していた少年男娼についてはこの記事の中では取り上げられなかったことなど、いくつかの問題点をも孕んでいた点も取り上げる。結果として、刑法改正に一役買ったが、国家による国民のセクシュアリティ管理強化につながり、ステッドが懸命に擁護しようとした社会的弱者に不利な作用を及ぼす結末となってしまったことなどがまとめられている。

原田範行氏の第7章「ジャーナリズムとセクシュアリティの世紀末——オスカー・ワイルドの自己成型」では、19世紀末のセクシュアリティとジャーナリズムを考える上で象徴的存在となったワイルドの作品と言動に焦点を当て、ワイルドと大衆ジャーナリズムという、一見相容れない二者の類似性を探ったうえで、ワイルドが同性愛をいかに表現し、向き合おうとしたかを、『真面目が肝心』と『獄中記』を通して明らかにしている。まず、ワイルドは、キャリアの初期は自らの名声獲得のために、積極的にジャーナリズムに関わっていた。そして、雑誌連載や評論といった形でジャーナリズムと関わった後に演劇という、自ら美を創造する芸術家の道へと進む。『真面目が肝心』では、ワイルド自身の同性愛にまつわる語彙が満ちており、彼の「内発的な自己実現の成果としての美」(283)をジャーナリズムとの関係の中で対比的に描出することに一定の成果を上げたとする。同性愛裁判の後に書かれた『獄中記』では、セクシュアリティを巡る真の自己表現を、語彙が十分に発達していなかった当時のジャーナリズムではできなかったことを、ワイルドが芸術的に達成しようとする彼の一貫した姿勢が見られるのである。

田中孝信氏の第8章「イースト・エンドと中国人移民——世紀転換期のスラム小説にみる異人種混淆」では、「最暗黒のロンドン」と呼ばれたイースト・エンドに独自の共同体を形成した中国系移民たちに対する中・上流階級の複層的な心的態度を、トマス・バークの一連の作品と他のスラム小説との比較対比を通じて明らかにしている。中国人と白人との恋愛関係を通じた異人種混淆と、セクシュアリティ、移民に対する嫌悪感と同時に内包する抗いがたい魅力が、いわゆる二項対立的に語られがちな西洋と東洋に対する読者の視線に対して再構築を促

す。『ライムハウスの夜』に見られる中国人は、単に阿片に溺れる悪徳の権化としてだけではなく、白人と同様、むしろ白人よりも道徳的に優れた人物もいることを白人男性作家が論じている点で、どの国の人間であっても、結局は個人の間人性に帰せられる点では変わりがないことを示唆する。そして、白人が中国人と交際して子をなすことで、人種の壁を乗り越えようとする点は、典型的なイギリス人の外国人嫌いに再考を促すところで、異人種混淆が一種の脅威ともなった。また、思春期の少女に対する白人男性の目線、あるいは中国人男性の卑猥な目線は、成熟した西洋と未熟な東洋というメタ的な比喻にも例えられよう。無論、事はそう単純には運ばないだろうが、価値の転倒や逆転をも促しうる驚異として目に映ったことは想像に難くないのである。

第9章「D.H. ロレンス『息子と恋人』のセクシュアリティと(ポスト)ヴィクトリア朝」で、武藤浩史氏はロレンスの初期作品である『侵犯者』と『息子と恋人』におけるセクシュアリティについて、ジョージ・エリオットの『フロス河畔の水車場』や『ドラキュラ』を始めとするヴィクトリア朝期以降のフェティッシュな性的嗜好の系譜を、特に女性の腕と口に着目して論じている。ロレンスの初期作品では、そうしたフェティッシュは、生の退化につながるのではなく、むしろ脱・退化=再生へと向かっている傾向があるとする。特に、『息子と恋人』においてポールがクララと関係を持った際に首筋に顔を埋めるという行為は、『ドラキュラ』を想起させる吸血、そして首筋の血管の脈動が究極の生命リアリティを表現するキーワードであり、そして、静寂がもたらす性的充足という3つの要素と関連している。それらは、明らかに性器中心主義に捉えられがちなロレンス作品の評価とは異なるものを示している。初期ロレンス作品に見られるセクシュアリティとは、実は「性的なものを含んだ生命的な究極の存在として描こうとしていた」(372)のだ。また、異性愛のみならず、近親相姦的、あるいは同性愛的なものも含まれているとしている。それによって、『息子と恋人』という作品の題名が、*Sons and Lovers* と複数形になっていることから明らかなように、単純に翻訳することは不可能なほどに多重性を秘めたものになっているのである。

全体を通して、ヴィクトリア朝時代から20世紀初頭にかけての多種多様で豊穡な性の様相を、政治・歴史・小説・文化など、幅広い角度から確認することができた。また、各論者は、数多いヴィクトリアン・セクシュアリティに関する先行研究に対して、新たな枠組みや価値観の創造につながりうる視点を極力提示しようとしていることが読み取れた。それは、まさに横溢したセクシュアリティを時系列という縦軸と文化という横軸で、縦横無尽に言葉で論じようという、これもまた一種の欲望を満たすものであるとも考えられるのである。いずれにせよ、

ヴィクトリア朝のジェンダー・セクシュアリティ研究に初めて触れる人にとっての入門書として好適であるし、既に専門としている研究者にとっても非常に示唆に富む有益な一冊であると言えるだろう。

2016 年度秋季総会

Annual General Meeting of the Japan Branch 2016

at Chuo University Surugadai Memoriam Hall, *Tokyo*

日時：2016 年 10 月 8 日 (土)

会場：中央大学 駿河台記念館

2016 年度の秋季総会は、中央大学駿河台記念館で行われました。JR 御茶ノ水駅から徒歩 3 分という抜群のアクセスを誇る会場は見晴らしも最高で、久しぶりに外部講師の原田範行先生をお招きしてのシンポジウムということで、会員以外の参加者も多く、活気に満ちた会となりました。心地よい会場を用意して下さり、会の運営に気を配ってくださった宮丸祐二先生をはじめ、ご協力くださった中央大学の皆さまに心より感謝いたします。(新野 緑)

講演 Lecture

司会：田村真奈美 (日本大学) Introduction by Manami TAMURA

ロンドンの胃袋——ディケンズと市場

The Belly of London: Dickens and Markets

新野 緑 (神戸市外国語大学教授)

Lecture by Midori NIINO

(Professor of Kobe City University of Foreign Studies)

平成 28 年度秋季総会第 1 部は、神戸市外国語大学教授の新野緑氏による講演であった。食欲をそそる美味しそうな食品の並ぶ市場の描写から始まった講演は、しかし、予想を超える広がりを持ち、ロンドンの市場を取り巻く歴史的状況の変化について、さらには技術革新と工業化の時代へのディケンズのアンビヴァレントな態度への考察にまで行き着く。長編小説からエッセイ、雑誌記事まで縦横に言及して進められる議論は、大変説得力のあるものであった。ある時期を境に

ディケンズの市場の描写が変わることなど、気づいていなかったディケンジアンも多かったのではないだろうか。また、エミール・ゾラによる市場の描写との比較など目新しい視点もあり、興味は尽きなかった。講演後は活発な質疑応答がなされ、ディケンズにとっての「市場」が持つ意味の広がり、一同改めて気づかされる機会となった。(田村真奈美)

海運と商業によって目覚ましい発展を遂げてきたロンドンは、国内外の多様な商品が売買される「市場の町」であった。なかでも、野菜や果物、肉類などの食品市場は幼いディケンズを強く惹きつけ、たとえばウォレンの靴墨工場での休憩時間、食べ物を買うお金の無い時にはいつもコヴェント・ガーデン市場を訪れ、パイナップルを眺めて過ごしたと、その自伝に言う。この幼少時の経験は、言葉遣いもほぼそのまま、自伝的な小説『デイヴィッド・コパフィールド』で、主人公の幼少時の体験に繰り返され、食品市場が作家のロンドン体験に占める重要性を明らかにする。

クリスマスの精霊に導かれてスクルージが眺める食品についての、エロティックで扇情的な描写は、それを見る人々の欲望の表象としての食品、あるいは市場そのものを示唆するが、この「生の原動力」としての「食」への鋭敏な意識こそが、ディケンズの描く食品市場の躍動感の根源にある。しかし、市場はそれだけを表すのではない。ロンドン随一の野菜市場コヴェント・ガーデンは、成功への野心と転落の恐怖という作家の矛盾した思いが複雑に絡み合って描写に独特の奥行きを生み、同様の矛盾は、家畜市場として有名なスミスフィールドの描写にも潜んでいる。屠殺された家畜の血や内臓が散乱し、犯罪者が紛れ込む、そのおぞましい場所は、充満する下層の人々の動物的エネルギーゆえに、都市型作家ディケンズの想像力を激しく掻き立てた。

ところが、1850年頃に境に市場は本来の魅力を失い、単なる社会諷刺の手段としてしか描かれなくなる。その背後には、1852年のSmithfield Market Removal Actが示す時事問題の影響もあるが、それ以上に重要なのが、工業化の時代に変革を迫られた市場自体の変容である。周知の通り1851年の万国博覧会にディケンズは否定的だったが、水晶宮をモデルに1858年に建築、開設されたパリの中央市場を描くゾラの『パリの胃袋』(1873)は、工業化の時代の新しい市場のあり方を提示している。ゾラとの類似と相違は、同じ社会改革を求めながら、それがもたらすはずの無機的、非人間的な秩序の世界の到来を忌避するディケンズの矛盾を明らかにするだろう。しかし、まさにこの矛盾こそ、ディケンズの作品を安易な図式化から守り、ゾラの自然主義を準備すると同時に超克する、独自のリアリズムを打ち立てることになる本源と言える。(新野 緑)

シンポジウム Symposium

ディケンズと 18 世紀

Dickens and the Eighteenth Century

司会・講師：原 英一 (東京女子大学) Introduction and Lecture by Eiichi HARA

講師：榎本 洋 (愛知県立大学) Lecture by Hiroshi ENOMOTO

講師：吉田尚子 (城西大学) Lecture by Naoko YOSHIDA

講師：原田範行 (東京女子大学) Lecture by Noriyuki HARADA

このシンポジウムでは、ディケンズあるいはヴィクトリア朝小説と 18 世紀文学との関係を、さまざまな側面から検討することを目的とした。大きく分ければ、18 世紀文学から見たディケンズあるいはヴィクトリア朝小説とディケンズあるいはヴィクトリア朝小説から見た 18 世紀文学ということになるだろう。ディケンズの読者は、小説家としての彼がスモレット、スターン、フィールドングなどの小説家から影響を受けたことは知っていても、18 世紀とディケンズ文学とがどこまで深く、有機的に関係するのか、あまり考えることがない。そのため、榎本洋氏によるチェスターフィールド、吉田尚子氏によるサッカー紹介は、貴重な勉強の機会となった。ゲストとしてお迎えした 18 世紀イギリス文学研究者として著名な原田範行氏は、18 世紀作家の方法的懐疑とディケンズの子供の描写との関係を論じて、非常に刺激的であった。(原 英一)

18 世紀演劇と「演劇的」ディケンズ

Eighteenth-Century Drama and Theatrical Dickens

原 英一 (東京女子大学教授)

Eiichi HARA (Professor of Tokyo Woman's Christian University)

ディケンズの本質である演劇性は多分に身体的なものである。足繁く劇場通いをして、観客として笑ったり泣いたりしているだけでは飽き足らず、素人芝居に入れ込んだ。小説を書いているときにも、その場面を発声や身振り手振り、全身で演じたりしながら執筆していた。彼の小説のこうした身体的演劇性は、18 世紀の演劇と演劇的小説家、サミュエル・リチャードソンから受け継がれたものであった。

18 世紀演劇の中でディケンズが最もお気に入りだったのは、ゴールドスミス

の『勝つために女は屈する』(1773)である。この芝居は、トニー・ランプキンという男がトリックスターとして活躍し、地主の屋敷を宿屋だと偽って客を泊めさせるという悪ふざけが中心になっている。ディケンズ自身がこの種のプラクティカル・ジョークを好んでいたことは、よく知られている。若いときにはこんなエピソードがあった。妻の実家ホガース家の人々が居間でくつろいでいるところに、水夫の格好をしたディケンズが突然窓から飛び込んでくると、口笛を吹きながら「ホーンパイプ」を踊り、再び窓から飛び出していった。数分後、彼がまじめくさった顔で現れ、何事もなかったかのように一同と握手を交わし、それから笑い転げたのである。晩年にジョージ・ドルビー等との朗読旅行中にも、列車内でホーンパイプを踊ったり、街中で道化を演じたりと、相変わらずのところを見せていた。

リチャードソンが描く稀代の放蕩者ラヴレイスもまた、プラクティカル・ジョークが大好きである。売春宿を堅気の下宿屋と偽ってクラリッサを住まわせるのはゴールドスミスの芝居と相似の趣向だ。痛風持ちのよぼよぼの老人に変装して、クラリッサの隠れ家を訪ねたり、別な場面では、クラリッサに会えなかった腹いせに小間物屋の店を乗っ取って、ジェントルマンの彼が店員としてふるまったりという変幻自在のプロテウスの活躍ぶりである。ディケンズは「リチャードソンは私のお気に入りでは決してない、何をするにしても決してトップブーツを脱がないからだ」(*Letters*, Vol. 5. 19-20)と言っている。ひどく堅苦しい作家だと思いついていたのだろうが、そのような思い込みは、リチャードソンを実際には読んでいなかったことを暗示している。

しかし、読む必要はなかったのだ。ドラマ化された『クラリッサ』をディケンズが観劇していることから分かるように、演劇の小説家リチャードソンは、数々のセンチメンタル演劇やメロドラマの潮流の中に組み込まれ、ヴィクトリア朝のマイナー劇場に生き残っていたのだから。

『バーナビー・ラッジ』における

サー・ジョン・チェスターとチェスタフィールド卿

Sir John Chester and Lord Chesterfield in *Barnaby Rudge*

榎本 洋 (愛知県立大学外国語学部准教授)

Hiroshi ENOMOTO (Associate Professor of Aichi Prefectural University)

『バーナビー・ラッジ』を執筆するとき、ディケンズは多くの資料に目を通している。ワトソンの『ゴードン伝』、ホルクロフトの記録や同時代人の回想録な

どがあるが、チェスタフィールド卿の『息子への書簡集』もそれに加えられる。『息子への書簡集』はチェスタフィールドが亡くなった翌年の1774年に、息子の未亡人によって編纂された600通余りの書簡集である。生前、チェスタフィールド卿は『ワールド』誌にも投稿し、死後、二巻本にその業績がまとめられ、当時の流行した作家だった。それ故にディケンズが『バーナビー・ラッジ』でチェスタフィールドを取り上げるのは確たる歴史性がある。更にチェスターというチェスタフィールドを賛美してやまない貴族を登場させること、ディケンズが『息子への書簡集』を取り上げた意義を歴史的、構成的にも考えるのが発表の趣旨である。

書簡の中でチェスタフィールド卿が人間の動機の根本として取り上げているのは、他人の高い評価を得るためである。そのために強調されるのが「徳のある振る舞い」である。その手段としてマナーズ（作法）の優雅さが幾度も強調される。それは、キケロなどの古典を勧める読書も、滔々たる演説作法の一環として捉えられる。服装や顔の表情などを重視する外面重視の処世術は、チェスタフィールドが「人を喜ばすため、取り入る術」を口にするとき、その変質を余儀なくされる。つまり、「徳のある振る舞い」から背後で「人を操る」という人心収攬の策への変質である。そのせいかチェスターも背後でヒューなどを操り、騒乱の黒幕的として描かれる。更にチェスター親子に見られる情愛の欠如も顕著である。書簡集ではチェスタフィールド卿の息子スタナップへの「批評家」的な態度で接する様子が言及される。また、結婚、家族への無関心、否定的な態度も一貫している。テキストではチェスターに夫人の存在は薄く、ヘアデル、ガッシュフォードは独身であり、デニス、バーナービ、ヒューは孤児である。ヒューの父親がチェスターであることはいびつな親子関係を象徴している。テキストのチェスター、ヒューの関係はチェスタフィールドと二人のスタナップの関係に相当する。

つまり、ディケンズはチェスタフィールドの処世訓の中に陰湿な人心掌握とパターナリズムの機能不全という形で既存の秩序を覆す破壊的な力の存在を認めたのである。それは、理想的と思われるヴァーデン一家すら不安定にするものであり、18世紀社会と重なったのである。

サッカーが描いた十八世紀のイギリス社会
 ——『ヘンリー・エズモンド』を中心にして——

The English Society in the Eighteenth Century

Thackeray Described in *Henry Esmond*

吉田 尚子 (城西大学 語学教育センター教授)

Naoko YOSHIDA (Professor of Josai University, Language Education Center)

サッカーの『ヘンリー・エズモンド』は十七世紀末から十八世紀にかけての英国の政治的動乱の時代を描いた歴史小説であるが、歴史小説としての性格を考える場合、冒頭に出てくる「歴史家は王にだけ侍り、庶民のことを軽視しているので、歴史を英雄中心でなく、日常的なものにしたい」という叙述が一つのキーワードになる。これは、英雄や宮廷中心の歴史の在り方に反発を示し、もっと庶民中心の歴史にしたいという趣旨で、いかにも一般民衆中心の歴史を描くかのような印象を与える。しかし、読み進めていくと、サッカーのその主張は必ずしも徹底しているとは言えない。ゲオルグ・ルカーチは『歴史小説論』の中でジャコバイトの運動を描いているスコットとサッカーの歴史小説を比較している。スコットは、その運動を必然的に敗北させる歴史的諸力の広範囲な客観的描写によって、運動の歴史的必然性を明らかにしているが、サッカーは一般民衆を見ず、物語を「上層階級の陰謀」に単純化していて、歴史的客観性を排除しているとルカーチは批判している。確かにエズモンドの歴史認識は曖昧で、個人と社会との問題で捉えると、彼の政治的宗教的信念は社会の歴史的背景から生まれるというよりもレイチェルやベアトリックスとの恋愛などの個人の人間関係が先にあり、それに連動して信条も形成されており、歴史小説としては個人中心の色彩が濃く、ルカーチの言う意味の民衆の間に胎動する思想と感情を表した歴史小説とは言えない。

そこで「歴史を英雄中心でなく、日常的なものにしたい」という意味の核心を別の視点から考え直すと、この物語ではルイ十四世やアン女王たちの美化された国王達の仮面を剥す事から始まり、殆どの登場人物たちの虚栄心や価値のなさが指摘され、それらの人々に対する幻滅の思いが連続して語られている事に気が付く。幻滅という新しい主題をイギリス小説にもたらしたのはサッカーが初めてだとされている。『虚栄の市』と共に『ヘンリー・エズモンド』は、自分の信じていたものが全て幻滅するという物語で、人間の善を信じる肯定的な生き方を示唆しているわけではない。従って、ディケンズなどの小説のように感情的、良心的問題を何らかの形で解決するというパターンを取らず、英雄という理想化された姿の仮面を剥いで、実態を暴く事によって真の歴史の実態を見せる為に、分か

りやすい教訓を覆い隠すような写実主義の方法を用いたと言える。

子どもの誕生とフィクションの変容

—— ディケンズにみる 18 世紀作家の方法的懐疑のゆくえ ——

Children in the Development of Prose Fiction: Dickensian Answers to
the Methodical Doubts of the Eighteenth-Century English Novelists

原田 範行 (東京女子大学教授)

Noriyuki HARADA, Professor of Tokyo Woman's Christian University

ディケンズの『大いなる遺産』は、自らをピップと呼び、周囲もまたそう呼ぶようになったという、主人公の名乗りによって作品が始まるが、この形は、実は、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』と近似する。作品はともに、語り手のアイデンティティを明確にすることから始まっているのだ。だが両者には、その直後に大きな違いが生じる。名乗りをあげた大人のピップは、急速な場面転換によって直ちに少年ピップを対象化し、この少年ピップが語り手となって最後までストーリーを主導することになる。他方クルーソーは、少年時代をほとんど語らない。彼は、「奇妙で驚くべき冒険の数々」を語るべく、その出発点が少年時代にあったことに一瞥を与えるのみである。

端的に言って、18 世紀作家は子どもを描かない。彼らの関心は、継続的で未完結な現在に向かっていく。したがって、『パミラ』のようにヒロインの語りが充満した作品であっても、そこに編者としての作者が介入し、語り手の事実誤認をほのめかしたりもする。そういうストーリーの破綻は、いわば、現実と作品世界を結ぶフィクションを紡ぐ際に生じる作者の方法的懐疑を示すものであって、18 世紀作家の作品にはしばしば見られる現象である。18 世紀作家が子どもを描かないのは、子どもの「その後」を彼らが知っているからであり、彼らの関心が「その後」へ向かっていたためであると言えよう。

そういう 18 世紀作家の方法的懐疑とそれに伴うストーリーの破綻の一端を、ディケンズは子どもを描くことで見事に回収してみせた。子どもは、「その後」の大人が自らの回想なり歴史として所有し、客観化できる、あるまとまりを持った対象であり、それゆえ、「その後」の関心をも大きな破綻をきたすことなく、その中に収斂させることができるからだ。だがディケンズは、もちろん、そうしたまとまりの中にのみ、作品世界を安住させることはなかった。彼の描く子どもや歴史、回想は、「その後」の大人の所有物としてではなく、むしろ、ありえたかもしれない可能性や選択肢という要素を強く帯びているからだ。主人公の生存

が例外的であったことを記す『オリヴァー・トゥイスト』の冒頭は、そういう作者の姿勢をよく示すものなのではあるまいか。この意味においてディケンズは、18世紀作家のフィクション執筆における方法的懐疑を回収しつつ、それを新たな形で展開してみせたと思われるのである。

懇 親 会

懇親会は、同じ駿河台会館の一階にあるレストラン「プレオール」に場所を移して行われました。新しい豪華な印象の綺麗な会場で、50名近くの参加者があり、賑やかな懇親会となりました。二次会、三次会にも多くの会員が参加して、東京の長い夜を堪能した会員の方も多かったことと思います。(新野 緑)

2017 年度春季大会報告

The Japan Branch Spring Conference 2017

at Bunkyo Campus, Matsuyama University, Matsuyama

日時：2017 年 6 月 10 日 (土)

会場：松山大学 文京キャンパス 東本館 7 階 会議室 1

春季大会は、会員のたつての希望もあって、この秋から改修工事が予定されている道後温泉に近い松山大学で開催されました。路面電車から見る松山の街は、お城を中心とした古風な建物と、極めて近代的な建物とが混淆し、独特の風情がありました。40 余名の方が参加して、熱気にあふれた会となりました。心地よい会場を提供して、会の運営に心を砕いてくださった矢次綾先生をはじめとする松山大学の皆さまに、心から感謝いたします。

研究発表 Papers

司会：松本 靖彦 (東京理科大学 教授) Introduction by Yasuhiko MATSUMOTO

『ニコラス・ニクルビー』と『坊っちゃん』

—— 漱石作品におけるディケンズの影響を追って ——

Nicholas Nickleby and Botchan: Dickens's Influence on Soseki Natsume

大前義幸 (日本大学非常勤講師)

Yoshiyuki OHMAE (Part-time Lecturer of Nihon University)

大前氏の発表は『坊っちゃん』と *Nicholas Nickleby* との比較研究である。教育現場にみられた墮落を著者が批判するにあたり、その悪い部分を体現したキャラクターを主人公に退治させるという勧善懲悪の図式を用いている点を中心に、両作品の共通点を検討した。(『坊っちゃん』ゆかりの松山の地で、漱石の世界を身近に感じつつ「赤シャツ」の分析に耳を傾けるのは貴重で贅沢な時間だった。)

冒頭で遺産相続があることや、主人公が理想の家族を追求していること等、両作品の共通点についての独自の着眼も光った。興味深かったのは、漱石が「余りにも精一杯書き過ぎる」と批評したディケンズの過剰さこそが、彼のヨークシャー学校批判を印象深く効果的なものに成し得たのではないかという大前氏の指摘である。漱石がディケンズの何に惹かれたかではなく、どこが気に食わなかったかに着目すると両作家の感性の特質が浮き彫りになるという示唆に思われた。(松本靖彦)

Nicholas Nickleby も『坊っちゃん』も、当日の教育問題や教師の資質、実態を鋭く、時にはユーモアを交えて書かれた作品である。とは言え、*Nicholas Nickleby* と『坊っちゃん』の関係は、既に松村昌家氏によって漱石が与えた影響が随所に見られる作品であることが論証済みである。しかし、両作品のテーマである「教育」や「教師の資質」などを含めて、いまだ論証済みではない箇所が見られると思う。そこで松村昌家氏の論文を再考察し、指摘されていない箇所を比較考察したうえで、ディケンズが夏目漱石に与えた影響を論じた。

松村氏の論では、*Nicholas Nickleby* 第13章での知的障害をもつスマイク少年に対する酷い仕打ちは、目に余るものがあり、ニコラスの同情をかき立てずにはいられないと述べている。ある日、スクウィアーズの虐待が極度に達するのを目の当たりにしたニコラスは、校長に飛び掛かり、彼が悲鳴を上げるまで懲らしめて、学校を立ち去る場面は、『坊っちゃん』の最後の場面、坊っちゃんと山嵐が赤シャツと野だいこの秘密の色里遊びの現場を押さえて、こっぴどい制裁を加える場面と相似していると述べていると改めて分析した。

また、改めて『坊っちゃん』の作品に登場する人物に目を向けてみると、赤シャツの登場回数が多いことに気付く。そして、坊っちゃんは、ディケンズ同様に真っ向から、この赤シャツを批判する態度を取っていく。さらに、赤シャツの言動を見ていくと、赤シャツの無意味な発言が校長や他の教員よりも重要な発言となっていることに憤慨する坊っちゃんの姿が、作品を通して描かれた漱石の教師批判の最たるものであることを指摘した。

ディケンズが *Nicholas Nickleby* を執筆した目的である、ヨークシャー学校に関しての社会風刺は、ディケンズの想像力がそれを現実以上に印象深く喜劇的な要素に描き上げたことで成功したものだと思われ、さらに、社会風刺を印象的なものにする作品構成が、漱石の初期作品にとっては、得るものが多い作品構成であったと指摘した。また両作品とも家族の離散から始まり、新しい家族をつくる努力、そして最後に伝統を守りながら新しい理想的な家族をつくるプロセスは、ディケンズと漱石に共通する彼ら自身が経験した出生からの生い立ちが無意識に

描かれていた、と結論付けた。(大前義幸)

Pierce Egan と Dickens

—— *Life in London* と Dickens の初期作品における演劇的ビジョンについて ——

Pierce Egan and Dickens: Theatrical Representation in Dickens's Early Works

村上幸太郎 (宮崎公立大学助教)

Kotaro MURAKAMI (Assistant Professor of Miyazaki Municipal University)

Sketches by Boz こそは 1820 年代的ロンドン —— 特に「現実」を転覆してみせるその演劇的都市空間 —— の素描を Egan から継承している作品だ、というのが村上氏の主論点。Egan と Dickens を丹念に読み比べ、〈本来の自分以外の人物を演じる〉ことを軸に、それぞれの書き手が描く都市の情景において、どのように既存の階級秩序や価値観が逆転し、目に映るままの光景が異化されているかを論じた件は聞き応えがあった。一方で、両者の共通点を示すという発表者の意図とは逆に、独特な想像の膨らませ方をしてみせる Dickens と Egan との差異が結果的に際立った感があったが、それはそれで先行作品の影響下から独自の Dickens 的想像力が開花していく過程を的確に捉えたことになるのではなかろうか。聴衆からは「ちっともおもしろない」という声もあった Egan のテキストだが、村上氏の手にかかると魅力的な作品に感じられた。(松本靖彦)

本発表では、ピアース・イーガンの『ロンドンの生活』と、『ボズのスケッチ集』をはじめとするディケンズの初期スケッチ作品を比較し、両者の観劇的な都市観察に類似点を見出した。

『ロンドンの生活』では、トムたちが下層民の盛り場の All Max と上流階級の社交場の Almacks を続けて訪れていることからわかるように、一見階級間のコントラストが強調されている。しかし、イーガンは、スラム街の道徳的墮落など考慮せず、実は犯罪者である者たちすらも、狡猾な悪だくみで観客を笑わせるグリマルディ風のクラウンに見立てている。こういった下層民たちの宴が“rich”な光景とされているのに対し、上流階級の外見を取り繕った舞踏会は退屈なものとしてされている。つまり“rich”, “poor”という概念が『ロンドンの生活』の中では逆転しているのである。また、闘犬場や馬の取引所など、階級の区別が曖昧になり、混然と雑多な様相を呈する場所もトムたちは非常に楽しんでいる。この作品では下層階級の集まりはパントマイムなどの演劇に形容されており、人々が階級によって定められたものではない役割を演じる場所が興味深い場所と

して表象されていることを考えると、ロンドン全体が演劇性を持った場所として描かれていると言える。

一方、ディケンズは、「人生のパントマイム」の中で、パントマイムは“*mirror of life*”であると述べ、転倒した裕福な老人を往来の人々が嘲笑し、暴行する光景を愉快的なパントマイムの瞬間だと述べている。こういった態度は『ボズのスケッチ集』でも表出しており、「人々に関する思考」における気取った格好で街を得意気に闊歩する徒弟たちや、「乗合馬車」で乗客を乱暴な運転で翻弄する御者などが楽しい存在として描かれている。ディケンズは一時的にせよ人々が日常の貧富の差や階級差が“*levelling*”するカーニバル的側面に痛快さを感じているのである。これらの場面では演劇の比喩を多用されており、ディケンズは彼らの動作や仕草を芝居の観客のように楽しんでいる。

このように、階級の逆転や相対化を描き、それらを演劇の一場面のように捉えるところに、イーガンとディケンズの作品の類似点がある。目に移る光景を演劇のように楽しむ時、ディケンズは市井の人々の貧困や悲惨な日常に目を向けることはない。1830年代は社会の諸問題を真面目に提起することが主流になった時代であるが、『ボズのスケッチ集』に散見されるある種の皮相的な都市観察の態度は、摂政時代の享乐的な都市観察の態度が受け継がれたものではないかと結論づけた。(村上幸太郎)

講演 Lecture

司会：鶴飼 信光 (九州大学 教授) Nobumitsu UKAI (Professor of Kyushu University)

翻訳とは何を訳すのか？

—— *Oliver Twist* から読み取れるもの ——

What We Translate When We Translate: Some Aporias in *Oliver Twist*

山本史郎 (東京大学教授)

Shiro YAMAMOTO (Professor of Tokyo University)

山本先生は以前、ロープの結び方についての実用書の翻訳を依頼されたことがあり、その時原書に間違いが多数あって苦労をなされたことについてのお話をご講演の枕としてされた。ロープの結び方のような事実と対応がはっきりする次元の翻訳は研究の対象にはならないけれども、原文が分かりにくい、非文法的な文

章である場合、それを分かりやすく訳してしまっているのか、翻訳と原文の類似の問題をどう考えるべきなのか、などの翻訳研究の難問を『オリヴァー・トウィスト』の葬儀屋でオリヴァーがいじめられて流す涙についての一節を題材に提起された。また、オリヴァーが救貧院で生き延びたことを描く箇所、「自然」がオリヴァーの生命の敵として死へ追いやりようとする力と捉えられることの違和感を、ディケンズや他の同時代の著作家の用法で「自然」は生命力を助けるものであることが多いことを調査して説明された。興味深いご講演で、活発な質疑応答がなされた。(鵜飼信光)

ディケンズ作品の翻訳が近年ますます盛んになっている。言うまでもなくフェロウシップの会員の方々によるきわめて正確で、しかも読みやすくて良心的な翻訳も数多い。「すぐれた翻訳」と評するのに何のためらいもない。

しかし、我々が現に生きている文化の中で自然にもってしまっている翻訳についての評価基準とはべつに、翻訳という行為について根本的に考えたい。今回の講演では「翻訳とは何を訳すのか」というタイトルのもと、『オリヴァー・トウィスト』を材料にして、私の翻訳論研究の一端をご覧いただくことにしよう。

第一の例は、第 29 章、‘She was not past seventeen’ ではじまる一節である。この一つの段落の趣旨は Rose Mayly がいかに天使のように清純無垢で美しい少女であるか、つまり美人の理想像を描くことにある。ところが、「明るくて幸せにみちた笑みは、家庭のため、炉辺の平安と幸福のために作られたものであった」という不可解な一文がある。これはヴィクトリア朝の文化という磁場によって形成されたものと考えられる。

二番目の例は第 7 章、徒弟となったオリヴァーが葬儀屋でお仕置きを受ける場面である。そこには ‘hiding his face in his hands, wept such tears as, God send for the credit of our nature, few so young may ever have cause to pour out before him’ という文がある。意味が幾層にも重なり合い、我々が「英文法」として教えられるものが破壊されている。これは、ディケンズ自身の辛い幼児体験の情緒的記憶が噴出して生じた行文の乱れであろうと思われるが、重層する意味を解きほぐすことすら難しい。

三番目の例は第 1 章、オリヴァー誕生の瞬間である。‘Oliver and Nature fought out the point between them’ という文の Nature とは何か？ オリヴァーは自然と戦ったのか？ 自然に助けられたのか？ 英語の自然な読みは前者だが、「自然」という語を用いて訳すのは困難である。その困難さは何に由来するのだろうか？

翻訳を評価する際に「正確さ」は極めて重要な基準である。しかし、意味の「正確さ」とは何か？ いやその前に、そもそも「意味」とは何だろう？ 「意

味」が一応定義できたとして、それを伝えるのが翻訳だろうか？ ならば翻訳された作品の中で「ディケنز」はどこにいるのだろうか？ つまり、意味以外の要素は、何をどう表現すべきなのだろうか？ あるいは現に何がどう表現されているのだろうか？

そのような問いから翻訳論が始まる。(山本史郎)

懇親会

懇親会は、松山随一の老舗料理屋として評判の高い「五志喜」で開催され、研究発表会に出席したほぼ全員が参加して、松山の郷土料理に舌鼓を打ちました。その後、洒落たパーでお酒をいただき、当日の研究発表やご講演による高揚感そのままに、夜遅くまで談笑が続きました。翌日は、改修前の道後温泉を沢山の会員の方が楽しまれたようです。(新野 緑)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部規約

Rules, Japan Branch of the Dickens Fellowship

制定 1970 年 11 月 12 日

改正 2000 年 6 月 10 日

改正 2005 年 12 月 1 日

第 I 章 総則

- 第 1 条 (名称) 本支部をディケンズ・フェロウシップ日本支部と称する。
- 第 2 条 (会員) 本支部は在ロンドンのディケンズ・フェロウシップ本部の規約に則り、日本に住み、チャールズ・ディケンズの人と作品を愛する人々を以って組織する。
- 第 3 条 (所在地) 本支部は支部事務局を原則として支部長の所属する研究機関に置く。
- (2) 支部事務局とは別に、財務事務局を、財務理事の所属する研究機関に置くことができる。
 - (3) 本支部の所在地の詳細については付則に定める。

第 II 章 目的および事業

- 第 4 条 (目的) 本支部はディケンズ研究の推進とともに支部会員相互の交流・親睦をはかることを目的とする。
- 第 5 条 (事業) 本支部は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
1. 全国大会および研究会の開催。
 2. 機関誌の発行。
 3. ロンドン本部および諸外国の各支部と連絡を密にして相互の理解と便宜をはかること。
 4. その他、本支部の目的を達成するために必要と認められる事業。

第 III 章 役員

- 第 6 条 (役員) 本支部に次の役員を置く。
- 支部長 1 名、副支部長 1 名、監事 1 名、財務理事 1 名、理事若干名。
- 第 7 条 (役員の仕事) 支部長は理事会を構成し、支部の運営にあたる。
- (2) 副支部長は支部長を補佐する。
 - (3) 監事は本支部の会計を監査し、理事会および総会に報告する。
 - (4) 財務理事は、本支部の財務を管理する。
- 第 8 条 (役員を選出および任期) 役員を選出は、理事会の推薦に基づき、総会においてこれを選出する。
- (2) 役員は任期は 3 年とし、連続 2 期 6 年を越えて留任しない。
 - (3) 財務理事の任期は支部長の在任期間とする。
 - (4) 役員に事故がある場合は補充することができる。その場合、補充者の任期は前任者の残任期間とする。

第Ⅳ章 会議

- 第 9 条 (議決機関) 本支部には議決機関として総会、臨時総会、理事会を置く。
- 第 10 条 (総会) 総会は本支部の最高議決機関であり、支部長がこれを招集する。
- (2) 総会は、役員を選出、事業の方針、予算、決算、規約の変更など、支部運営の重要事項を審議する。
- (3) 総会の議決は出席会員の過半数による。
- (4) 総会は原則として年に 1 回開催する。臨時総会は必要に応じて開催する。
- 第 11 条 (理事会) 理事会は本支部の執行機関として支部長が随時これを招集し、本支部の目的達成上必要な事項を審議する。

第Ⅴ章 会計

- 第 12 条 (経費) 本支部の経費は、会費、寄附金、その他の収入を以ってこれにあてる。
- 第 13 条 (会費) 会員は、本支部の運営のため、別に定める会費を負担する。
- 第 14 条 (会計報告および監査) 本支部の会計報告ならびに監査報告は、毎年 1 回、総会で行う。
- 第 15 条 (会計年度) 本支部の会計年度は 10 月 1 日より翌年 9 月 30 日までとする。

付則

- (1) 本支部の支部長、副支部長、監事および財務理事は次の会員とする。
- | | | |
|------|----------------------------|------|
| 支部長 | 京都市北区小山下内河原町 3 番 4 号 | 佐々木徹 |
| 副支部長 | 神戸市灘区篠原北町 3 丁目 8 番 8 号 | 新野 緑 |
| 監事 | 広島市西区己斐中 3-2-17 | 植木研介 |
| 財務理事 | 奈良市あやめ池南 6 丁目 7 番 39 号 403 | 玉井史絵 |
- (2) 本支部の事務局は、京都市左京区吉田本町 27 番 1 号、京都大学大学院文学研究科佐々木徹研究室に置く。
- (3) 本支部の財務事務局は、京都府京田辺市多々羅都谷同志社大学 京田辺校地 香柏館高層棟研究室 713 玉井史絵研究室に置く。
- (4) 本支部役員の氏名、住所、所属研究機関に異動があったときは、この付則にある該当事項は、総会の議を経ることなく、変更されるものとする。
- (5) この規約は 2005 (平成 17) 年 12 月 1 日から適用する。

* * * *

※会員にはロンドン本部機関紙 (The Dickensian) (年 3 回発行) および支部『年報』(年 1 回発行) を送ります。

※会費の支払いは、郵便振替でお願いいたします。(振替番号 00130-5-96592)

『年報』への投稿について

※2018年より変更がありますので、御注意下さい。

論文投稿規定

- (1) 論文は日本語、英語いずれも可(英文の場合は事前にネイティブ・スピーカーによるチェックを受けてください)。
- (2) 論文の長さは、原則として、日本語の場合は18,000字(400字詰原稿用紙換算45枚)以内、英語の場合は7,000語以内とします。
- (3) 論文原稿の締切は6月10日(必着)。編集担当理事の審査(採・否・再提出)をへて受理・掲載します。
- (4) 論文原稿は、原則として電子メールにより添付ファイルとして、副支部長宛に提出してください。(アドレスは日本支部ウェブサイトにあります。)

電子メールが利用できない場合には、清書原稿3部(コピー)を副支部長宛送付してください。

論文の書式について

- (1) 書式の細部については、原則として、MLA Handbookの最新版に従ってください。最終的な書式形式は編集で統一します。
- (2) 註については、脚註ではなく、尾註を用いて下さい。
- (3) 文献表については、引用した文献を、論文の末尾に付けて下さい。
- (4) 日本語論文で欧米人名を「サッカー」などと日本語表記する場合には「サッカー (William Makepeace Thackeray)」とカッコ内に原語を表記してください。
- (5) ディケンズの著作・登場人物名については、日本語表記する場合でも、原語を示す必要はありません。示す場合は、上記(4)に従って一貫して表記してください。
- (6) 数字については原則としてアラビア数字としてください。(例:「一九世紀→19世紀」,「一八一二年→1812年」,ただし、「一人や二人」や「一度や二度」などは例外とします。)章分けにはローマ数字を用いることができます。

論文以外の書評, 国際学会報告等

- (1) 締切は8月10日です。原則として電子メールにより、添付ファイルを副支部長宛に送付してください。電子メールが利用できない場合は、清書原稿1部を送付してください。
- (2) 書式については、論文とは異なり、原則として著者の自由です。ただし、数字表記については論文と同様アラビア数字とします。
- (3) 長さは、書評6,000字(原稿用紙換算15枚)以内、国際学会報告4,000字(原稿用紙換算10枚)以内、国際学会報告の写真的添付は4枚以内とします。写真は可能な限りデジタル・データをご提供ください。
- (4) 編集上の都合により採用できない場合もあります。また、編集担当者の責任で内容を大幅に編集する場合があります。あらかじめご了承ください。

※論文・一般記事等を問わず、すべての原稿に「英文タイトル」と「著者名のローマ字表記」を必ず付記してください。

※<原稿の文字カウントについて>ウィンドウズの場合は、「校閲」メニューの「文字カウント」で、また、マックの場合は、「ツール」メニューの「文字カウント」で、注や参考文献を含めて、投稿規定で定められた長さに収まっていることを、必ず確認して下さい。英語の場合は「単語数」、日本語の場合は「文字数(スペースを含めない)」です。

ディケンズ・フェロウシップ会員の執筆業績

Publications by Members of the Japan Branch

(2016～2017)

著書・編書・共著

- 新井潤美 『魅惑のヴィクトリア朝——アリストホームズの英国文化』NHK 出版新書。2016. 8.
- 新井潤美 『パブリック・スクール イギリスの紳士・淑女のつくられかた』岩波新書。2016. 11.
- 新井潤美 (共著) 「表象文化 (映画) を教える——「アダプテーション」というコンセプト」日本英文学会 (関東支部) 編『教室の英文学』研究社。2017. 5. 123-29.
- 新井潤美 (共著) 「ジェイン・オースティン作品の映像化」『ジェイン・オースティン研究の今——同時代のテキストも視野に入れて』彩流社。2017. 267-80.
- 市川千恵子 (共著) 「欲望の封印から充足の模索へ——エリス・ホプキンズとヴィクトリア朝中期の性の葛藤」『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』彩流社。2016. 12. 193-222.
- 要田圭司 (共編著) 『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』田中孝信・要田圭治・原田範行編 彩流社。2016. 12.
- 閑田朋子 (共著) 「新聞税 (知識税) と思想弾圧——1790年代から1850年代において」『英米文学に見る検閲と発禁』彩流社。2016. 9.
- 閑田朋子 (共著) 「「不適切な」議題と急進派女性ジャーナリスト, イライザ・ミーティヤード——一八四七年スプナー法案 (誘惑・売春取引抑制法案) の行方」『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』彩流社。2016. 12.
- 閑田朋子 (共著) 「イングランドにおける大衆読者層の形成と拡大」小林秀美・中垣恒太郎編『読者ネットワークの拡大と文学環境の変化——19世紀以降にみる英米出版事情』音羽書房鶴見書店。2017. 5.
- 佐々木 徹 (共著) 「今, 日本で, 英文学にどう取り組むか?」日本英文学会 (関東支部) 編『教室の英文学』研究社。2017. 5. 2-9.
- 佐々木 徹 (共著) 「小説のスタイルをどう教えるか」豊田正倫・堀正広・今林修編『英語のスタイル』研究社。2017. 2. 178-90.
- 田中孝信 (共編著) 『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』田中孝信・要田圭治・原田範行編 彩流社。2016. 12.
- [中妻 結] Yui Nakatsuma(共編著) *London and Literature: 1603-1901*. Barnaby Ralph, Angela Kikue Davenport, Yui Nakatsuma eds. Cambridge Scholars Publishing, 2017.
- 新野 緑 (共編著) 『言葉という謎——英米文学・文化のアポリア』御輿哲也・新野緑・吉川朗子編。大阪教育図書。2017.

- [新野 緑] Midori Niino “The Belly of London: Dickens and Markets.” *London and Literature : 1603-1901*. Barnaby Ralph, Angela Kikue Davenport, Yui Nakatsuma eds. Cambridge Scholars Publishing, 2017. 95-110.
- 新野 緑 「マナーの語るもの——『説得』における階層・認識・主体』『ジェイン・オースティン研究の今——同時代のテキストも視野に入れて』日本オースティン協会編, 彩流社. 2017. 89-105
- 松村昌家 (注解) 夏目漱石 (共著) 『倫敦塔ほか 坊ちゃん』(漱石全集第2巻, 岩波書店) 2017. 1.
- 水野隆之 (共著) 「十九世紀における小説読者の拡大とディケンズ」小林秀美・中垣恒太郎編『読者ネットワークの拡大と文学環境の変化——19世紀以降にみる英米出版事情』音羽書房鶴見書店. 2017. 5. 68-94.
- 渡部智也 (共著) 「ジャスパー, 恐ろしい男——『エドウィン・ドルードの謎』における「恐ろしさ」について」御興 哲也・新野 緑・吉川朗子 (編著) 『言葉という謎——英米文学・文化のアポリア』大阪教育図書. 2017. 3. 345-59.

論文

- 青木 健 「戯曲と小説の間——The Lamplighter と The Lamplighter’s Story の関係性——」『成城文藝 成城学園創立100周年記念号』240 (2017. 6): 1-14.
- 梅宮創造 「最期の一作——『エドウィン・ドルードの謎』について」早稲田大学英文学会『英文学』103 (2017. 3): 13-23.
- 川崎明子 「『ジェイン・エア』と『嵐が丘』における「食べさせる / 食べさせられる」行為」『英国小説研究』26. (2017. 4) 英宝社: 114-34.
- 中村 隆 「『オリヴァー・トウィスト』におけるホガース的瞬間」『山形大学人文学部研究年報』第14号 (2017. 2): 1-18.
- [原田昂] Takashi Harada. “Milly Swidger in The Haunted Man: The Bridge as a Form of Media.” *Journal of Social System Studies*. 15. (March 2017): 49-60.
- 原田 昂 「記憶, 疫病, 出版——The Haunted Man における幽霊と近代的社会意識の形成」『英米文化』47 (2017. 3): 31-45.
- 水野隆之 「明治期におけるディケンズの『若夫婦に関するスケッチ』翻訳受容」『英米文化』47(2017. 3): 13-29.
- [水野隆之] Takayuki Mizuno, “Dickens and Poe.” 『欧米言語文化研究 Fortuna』28 (2017. 3): 3-14.
- 吉田一穂 「Villette——〈女性が一人で生きていくこと〉に対するイギリス人女性ルーシーの意識とムッシュ・ポール・エマニュエルによる許容性」『人間文化研究 Kevin R. Gregg 教授 退任記念号』第6号 (2017. 3): 131-52.
- 渡部智也 「ディケンズ対マリアット——新たに発見された手紙をめぐる——」『福岡大学研究部論集』(A: 人文科学編) 16.3 (2017): 79-85.

翻訳

- 市川千恵子 (訳) マリアン・トールマレン (編著) 第3章「ブロンテ姉妹の生涯と作品に

- ゆかりのある北イングランドの場所」『歴史のなかのブロンテ』内田能嗣・海老根宏 (監修) 大阪教育図書. 2017. 1. 32-43.
- 井原慶一郎 (訳) トッド・マガウアン (著) 『クリストファー・ノーランの嘘／思想で読む映画論』フィルムアート社. 2017. 5.
- 加賀山卓朗 (訳) 『オリヴァー・ツイスト』新潮社. 2017. 5.
- 川崎明子 (訳) マリアン・トールマレン (編著) 第14章「ブロンテ姉妹の書簡」『歴史の中のブロンテ』内田能嗣・海老根宏 (監修) 大阪教育図書. 2016. 12. 146-155.
- 佐々木徹 (訳) チャールズ・ディケンズ (著) 『荒涼館 1』岩波文庫. 2017. 6.
- 田辺洋子 (訳) チャールズ・ディケンズ (著) 『アメリカたんぼう / イタリア小景』溪水社. 2016. 12. 21.

会員業績報告についてお願い

次号に掲載する会員の業績報告は随時受け付けております。2017年7月から2018年7月までに、著書・編著・共著・論文・翻訳を刊行された会員の方は、上に掲載の書式に従って、必要情報を日本支部HPの業績フォームを通じて、あるいは副支部長宛メールにてお知らせ下さい。41号掲載の業績報告の締め切りは、2018年7月末日です。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

書評対象図書及び評者・国際学会報告者の募集

『年報』の書評では、ディケンズ及びディケンズと関係の深いヴィクトリア朝文学・文化関係の書籍を扱っております。国内・国外を問わず、取り上げるべき本がありましたらご推薦下さい。評者についても自薦・他薦・著者本人の推薦のいずれも歓迎です。随時受け付けておりますが、次号への掲載を希望される場合、2月末日までに御連絡をお願いします。また国際学会に出席される予定の方には、国際学会報告をお願いしたいと存じますので、学会開催の3週間前までに、御連絡下さい。いずれも副支部長までお申し出下さい。よろしくお願いいたします。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部
お問い合わせ先

〒 606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学研究科 佐々木徹研究室
URL: <http://www.dickens.jp>
email: <tsasaki@bun.kyoto-u.ac.jp>

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動および会員の情報につきましては、上記のいずれかにお問い合わせ下さい。新規入会希望の方も随時受け付けております。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部
役員一覧

ディケンズ・フェロウシップ日本支部では「支部規約」に従い、2014年総会において選出された以下の役員、および名誉職・補佐職を以て、運営にあたっています。

役員の任期は2014年10月より2017年9月までです。

名誉支部長	小池 滋	東京都立大学名誉教授
支部長	佐々木 徹	京都大学大学院文学研究科教授
副支部長	新野 緑	神戸市外国語大学外国語学部教授
理事 (財務担当)	玉井 史絵	同志社大学グローバル・コミュニケーション学部教授
理事	要田 圭治	広島大学大学院総合科学研究科教授
理事	鵜飼 信光	九州大学教授
理事 (Net 担当)	松岡 光治	名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授
理事	田村真奈美	日本大学教授
監事	植木 研介	広島大学名誉教授
VOD 担当補佐	渡部 智也	福岡大学専任講師
書誌作成担当補佐	大前 義幸	日本大学非常勤講師
文献作成担当補佐	長谷川雅世	高知大学講師
大会案内作成担当補佐	西垣 佐理	近畿大学准教授
『年報』編集委員	新野 緑 (委員長)・鵜飼信光・要田圭治・田村真奈美・松岡光治	

編 集 後 記

『年報』40号をお届けします。今年も昨年に続いて4編の投稿論文があり、編集委員会の慎重な査読の結果、2編が掲載可と認められました。今年度も優れた論文を複数掲載できたことを、大変嬉しく思っています。すでにお知らせしました通り、本年度から日本語投稿論文の字数制限を大幅に増やしました。これは英語論文の字数制限との格差を調整するためでもあり、また、大部のディケンズ作品を論じるには従来の字数制限では少し窮屈ではないかという編集委員会の判断によるものです。十分に論じていただける長さとなりましたので、是非積極的なご投稿をお待ちしております。

今号には、残念ながら、国際学会報告等のご投稿がありませんでした。Fellowship's Miscellanyのコナーには、従来の国際学会報告以外にも、興味深い情報や企画がありましたら、どんどん掲載させていただきたいと思っておりますので、ご希望の方は、副支部長宛お知らせ下さい。

今号にも、論文以外に、会員の皆様から多くの優れた書評や大会報告をお寄せいただきました。有り難うございます。貴重な時間を投稿論文の査読や書評本の選定に宛てて下さった編集担当理事の皆様にも、心より御礼申し上げます。

なお、今号は、私が編集する最後の『年報』となりました。慣れないことも多く、ご迷惑をおかけしたことも多々ありましたが、この6年間なんとか毎年期限までに刊行できましたのは、理事をはじめ、ご協力くださった会員の皆さまのおかげです。この場を借りて、御礼申し上げます。

(新野 緑)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報
第40号

発 行 2017年11月15日

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

代表 佐々木 徹

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院文学研究科 佐々木徹研究室内

印 刷 明文舎印刷株式会社

***The Japan Branch Bulletin
of the Dickens Fellowship***

No. 40

ISSN: 1346-0676

Edited by Midori Niino

Editorial Board

Keiji Kanameda

Mitsuharu Matsuoka

Midori Niino

Manami Tamura

Nobumitsu Ukai

Published annually by the Japan Branch of the Dickens Fellowship

Graduate School of Letters,

Kyoto University

Yoshida Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan

[http:// www.dickens.jp/](http://www.dickens.jp/)

©2017 The Japan Branch of the Dickens Fellowship